



特 235
444



始



特 23+

444

栞子送人遊

佛陀のふんばくのて

特235
444



佛陀の
心と凡夫の心



2nd

1890-91

1890-91



佛陀の心と凡夫の心

予は何に向ても弱きもの、就中病魔に向ては最も弱きものにて、僅の風にも皮膚を痛め咽喉を害して僵れます。今より十七年前には強き二豎の襲ふ所となり、半ケ年餘醫藥に親みましました。今春は九九の歳を越へて一一が一と呼ぶ様に成た爲か、小兒のよく悩む百日咳にかゝり一百二十日病床に苦みましました。御報謝の勤不足あれば、暫時据れとの佛の内命あるが如く、又復此世に居續ける事に成て引越を中止しました。乃て再び夢物語を記取する思ひに成たが、顧みれば何の彼のご語るも書くも自分の力は寸毫もない。みなこれ佛祖の御恩徳によるものにして、硯海を漾はす一滴まで佛祖の冥護あるか

らである。眞似をした生涯、祖師の眞似をした信ずるも眞似、行ずるも眞似、黒衣黒袈裟も亦祖師の眞似、生涯眞似に過す似せ物。似せ物と罵られつゝやめぬ眞似、ねてもさめてもごなふお六字。こんな口の動きと共に事の動きし物の集り、畢竟第二の夢物語なれど、信心は如來の子なりと、佛陀の説きたまへる金言の尊とく有難きを思ひ浮べ、慚愧と歡喜の胸に溢れたるまゝ、夢物語と名くるを止めて佛陀の心と凡夫の心と稱することゝしました。もとより老耄の裏華笑ふにも足らぬもの、笑ふて下されば頂上の幸ひなり。南無阿彌陀佛合掌。

八十二老衲柳陰

目次

一	生れた日も知らぬ……………	一
二	底知れぬ母の慈悲……………	四
三	父の嚴と兼務の母……………	六
四	食膳に向つて教訓……………	九
五	末は三界の大導師……………	一〇
六	學寮に典坐の生活……………	一一
七	王政維新の幕開け……………	一三
八	秘密の上の秘密事……………	一四
九	圍み堅牢に強き繩……………	一六
十	早合點をばするな……………	一九
十一	寡言にして實あり……………	二二

十二	和歌の道への初旅	二四
十三	詩道の初旅是から	二六
十四	根を掘り枝を叩て	三〇
十五	學問の師と乳の母	三二
十六	蜂の巢やの無常觀	三八
十七	善知識を求る行脚	四〇
十八	母子顔を合せた時	四五
十九	佛門警鐘著述の縁	四七
二十	母の注意の不到翁	五〇
二十一	堪忍實行者の實現	五一
二十二	何事も練習による	五三
二十三	物事に拘泥するな	五九
二十四	宗祖親鸞聖人を見よ	六〇

二十五	無限の生命を望め	六三
二十六	如來の慈懷に入れ	六七
二十七	自力修行者の苦辛	七〇
二十八	中江藤樹先生の孝	七三
二十九	師の發病母の往生	七五
三十	念佛餘韻を記して	八一
三十一	雅號靜所又は椰陰	八三
三十二	書室三笑堂に就て	八五
三十三	雲石柳涯嘯月の文	八八
三十四	伊勢國は縁深き所	九三
三十五	法嗣に捧る詩一篇	一〇一
三十六	眞宗問答二十一個	一〇三
三十七	往生人の解釋其他	一一一

三十八	生死無常とその他	二一五
三十九	今が浄土行の道中	二一八
四十	母の肖像を拜して	二二二
四十一	父は釋迦母は彌陀	二二五
四十二	世は遷流を義とす	二二六
四十三	因果の明鏡を見よ	二二九
四十四	善惡取捨に心せよ	二三五
四十五	一日一日を平穩に	二四五
四十六	人の猿真似なきや	二五〇
四十七	何事も加減をせよ	二五五
四十八	目的と云は何事か	二六一
四十九	改造論に唯物唯心	二六九
五十	夢の世に夢を語る	二七三

佛陀の心と凡夫の心

椰陰 小泉了諦述

一 生れた日を知らぬ

何時生れたのだ、と問はれてその年月時を答ふることの出来ないが私である。答の出来ないも道理、生れた時を覺へて居ませぬ。それでも誕生日を口にして居るではないか、私が誕生日を口にするのは自ら知て云ふのではない、親から生れた時日を聞かされて知たので、それも今日より振り返りて、何年何月何日何時に聞たのだ、と云ふことは出来ない。覺へはないが、親の云はれた言を聞て、左様

かと疑ひなく信じたので、誕生日に間違ひはないのである、子に對する親の言に嘘がないのを信じて居れば、誕生日にも嘘はない。何時から迷ふた凡夫だと、問はれても答の出来ぬ凡夫である。それでも無始以來今日まで、穢悪汚染にして清淨の心なし、虚假諂偽にして眞實の心なしと、常に口にして居るではないか。私の様な自身が生れた近き誕生日さへ知るここ出来ぬ凡夫が、無始以來なんて遠き過去を知て云はれる筈はない。只先聖古徳の教へによりて、聞かされ始めて信じたのである。それも今日から振り返りて、何の年、何の月、何の日、何の時に教へを受けて信じたと云ふことは出来ない。出来ないのなら、曖昧模糊として不安であるべき筈でないか。それも無始以來の迷ひだこ、判然口に吐くは何と云ふ譯なるか、信じた

私に覺へはなくも、教への根元が佛説であるもの、判然云はずに居れ様か。

信は道の元、功德の母なりとも、信心は如來の子なりとも、釋迦佛陀は説かせられてある、功德の母といひ、如來の子なりといはるゝは信の一法であることを忘れてならぬ。

二 底知れぬ母の慈悲

生れてから何をして來たか、乳を呑むことも知らなかつたのである、知らないものに乳を吞ませて呉れたは母である。母の慈悲は底の知れぬ深きものである、生質弱き私を育てるためには、身も痩せたといふことを聞か、母の身の瘦せたのが私の肥立つた原因と成たのである、五歳になるまでは、今度は六ヶ敷と醫者に見限られたこ

一年に三四度も有たと云ふ、灸や薬やの効能がないではなからふ
 けれども、母の丹精至誠の機能が七分を占て居たに相違ないと思ふ。
 世間で云ふ七つ八つは憎まれ盛りと、昔から云ふ諺語に背かず、私
 の七八歳世諺に洩れぬ徒ら小僧で有た。父は痼癩の強き方なので、
 時としては思ひ切た切諫を加へ、私より母が涙を翻ぼしたことが多
 かつたのである、或冬でしたが、雪の五尺ばかり積つた中へ抛られ
 て、既に死せんとしたが、母の命懸にて救はれたのである。今から
 考へてみるに、母が救ふのを豫期して爲した父の所爲に相違なかつ
 た。そこを思ふと慈悲の點は、父と母とに異りはないのである「父
 はうち、母はそばからなでつるを、かはるころと、子やおもふら
 ん、」古人はよく情を穿つて讀で置きました、雪の中へ抛り出した父

と、救ひ上て呉た母と同じ慈悲は思はれなかつたに、それが撲つ
 も、無疵の人間に仕様と云ふ、親心撫でるも卑屈の人間にさせまひ
 と云ふ親心。父母共に親心の慈悲は同じで有たのであります。何う
 して父母に慈悲の相違がありません。父が私を雪の五尺も積つたる
 中へ抛つたのは、愛兒を千仞の崖下へ落す親獅子で有たのです。落
 された子獅子は、一層の勇氣を増すと聞て居ます。雪中へ抛られた
 私は、平々凡々に終つたは恥かしきことである。

父は私が十二歳の時に此世を去た、弟は七歳にて妹は母の胎内に
 在て七ヶ月と云ふ悲哀極まるありさま、三十三歳にて未亡人と成た
 る母はどんな心でありましたらふ。頑是なき弟と腕白なる私等、目
 に餘るばかりではない、何なるか前途分らぬ婦人の大役を控へた

六
妊娠の身である。泣くにも泣かれぬと云ふ悲惨の極點は母の一身に迫りて居た。私は父を喪ふた、將來に向つて心配から翻ぼした涙は一滴もない。訪ひ來る人々が哀悼の意を述べ、私等を見ては泣くの何ごなく悲く成て、貰ひ泣きをしたのである。弟は泣く相場ぢやない、悔みの人や手傳の人が寄り集りて、賑はしひのを喜んで飛び跳たりして居ました。親の心子知らずとは斯様な状態を寫した言と申してよからふ、喜べば喜ぶ程母の心には悲みを増したに相違ありません。

三 父の嚴を兼務の母

未亡人ご成た母は、一人で二人前の役目を勤むることになりました。たのです、父は嚴に母は慈に、分擔して養育した所を、嚴なる父の

役目をも兼務することになった母の大任、殊に父の長病にて所有の金錢は袋底拂ひ盡し、母自身の衣服も櫛笄も悉く賣却して醫藥の料に使ひ果し、小寺に似合ぬ大負債を母一人に引受けたのである、その中から私等兄弟の教育を世話し様といふこと故、並や大抵の心配は無かつたらふ。門外へ出て遊戯に耽り、餓鬼大將になる私は多くの子供の中にて威張りちらし、たま／＼手下の子供雑兵の感情を損ふや、多くの子供は逃げ乍ら、なんだ親なし坊／＼と連發された。その言には六連發の銃丸よりも冷りと頭腦に答へました。

私は忘れて居た父の喪を思ひ浮べて、悲しき餘りに、お母さんみんなが私を親なし坊と云ひました、と告乍ら憤慨の涙をふるへば、母は誰れが親なし坊と云つても親なしでありませぬ、この母はお前

八
の親ですよ、と宥める下からほろりと涙を落されたのが今猶私の眼中を去りませぬ、定めて母の心の内には私と共に憤慨を有つて居られたのでせふ。若し妾が死んで良人が残つて居られたなら、片親なくとも親なし坊と呼びはせまい、女親の悲さには父のないために片親あり乍ら親なし坊と呼ばれるのである、片親たりとも有たら、親なしとは云つて呉れるな、女なれども子のためには親であるご、母の心に幾回も繰返されたのであらふご思へば双涙を催さずに居れない。

母は女親である上に、男親を兼る覺悟で居られたので嚴格でありました。餘所の子のお母さんは女に違ひないが、私のお母さんは姿は女なれども男でなからふか。子供心にこんなことも思ふたことも有

たのは、厳しかつたのに恐れた時である。けれども可愛がつて下さるごきのやさしきこと、子供心にも嬉し泣きしたことも有た。

四 食膳に向つて教訓

野菜物一つ貰つても、御佛前に供へた後でなければ使用したことはない、三度の食膳に向ふごきは母は申しました。御禮を申してたべるのですよと必ず合掌させました、御恩を忘れてはなりません、一粒の御飯も粗末にしてはならぬ、口に入るまでには人手にかゝることが七十二回です、とき々、斯う云ふ風に毎日母親から聞かされて又始まつたと聞く度におもひました、今より顧みますと母の心の用ひ方深く且つ厚かつたのに恐れ入ります。

私と弟とは五つ違ひの兄弟、中の悪ひ兄弟と他から云はれたこと

はなかつたが、中のよすぎるために巫坐戯徒ら事を共謀したこともある。母は私等二人を戒めた、偶ま人ありて奥様そんな徒らをなさつたらお頭の一つもぼんとお見舞なされ、ご戯談半分はんぶんに申すと其時の母の一言、はい左様です頭を叩ひてやつてもよい様なれど、あの子等は末に佛祖様のお慈悲を傳ふべき身の上、三界の大導師となるものを女親位が頭に手を舉てはすみませぬ。

五 末は三界の大導師

三界の大導師となるものに、たとひ親でも女風情が手を舉てはすまぬ、この言を聞いたときは何の事ことも知らずに聞き流した私、少しく道理の解つて来た頃、此母の言を思ひ出し、我母は中々心得こころえを持た親で有た位に理窟りくつでかみしめて居ました。理窟に感心して居た内

は親の恩は未だ知られぬのでした。あの子等は末に三界の大導師となるもの、女親位が頭に手を下してはすまぬ。私等を重んじて下さつたその言のまゝが佛陀の金言、祖師の教訓の尊重すべき事を背景にみせられたのである。知らずくの間あいだにこの母の言は腦裏に泌み込み、身は不肖乍ら重任大職を帯て居るのであると、心得生涯を通じてこの老年になるまで珠數じゆすうを手にする事が出来たのであります。母の形は茶毘だびに附してないけれども、母の心は今猶私に添ふてあると思へば恩に感じます。素讀習字も母の監督かんごく厳しひので先生も注意して下され、悪る遊びの連中に加はらず、精勤證も貰はれたのである。

六 學寮に典坐の生活

私は十四歳より修學の人となりて他に出ました。美濃の大安師の學寮に入るため十六歳の時であります。典坐と云ふ役に困つた昔が僣ばれます。學寮とは學校の舊名なれども大體の組織が違ひまして現代の青年が聞かれると可笑い様なことが多ひのである。典坐役は寮長を除く外、總員が順番に炊事や掃除を受持つのである。百人前後の飯炊きや副食の調理やを二人や三人位の典坐で勤むるは艱難のここで有た。相手が善ければ扶け合いますが年長者の意地悪るに組合ふと何も彼も命令の位置に立ち、自分は手を下ろさず私のみに働かせる云ふ始末、辛き目に逢ふご國許を思ひ出し、温かき母の膝下が戀しくなり便所へ隠れては泣きました。二年三年の間は尻から追はれる様に先輩に使はれ通したのである。

艱難は人の師なり、人は艱難の弟子なりと、古來申しますが古人我を欺かず入寮以來の艱難は私のために良師範で有た、母の膝下に育てられたとき嚴格を恐れて、こんなに云はれずともよからふ、餘所の子の親はこんなではなからふ、と思ふ度毎に母を恨んだことがある。その昔を僣び母の恩の深きを汲まるゝも、艱難に逢ふた高庇である、一年に一回、或は二回歸省して母の健康を祝した喜びは格別でありました。思ひ顧みれば感泣するばかりである。

七 王政維新の幕開け

それこれして居る間に徳川幕府の大政返上となり、王政維新の新たなる幕が開けました。君主專制政治が立憲政體に變じたは勿論の事學問の道も一變して一時は漢學廢止論まで持出し、禿頭の子曰先

生もえ、び、し、を口にしなければならぬ様に成た、漢學に代る
に洋學と成たので、宗旨も佛教を基督教に新め様なご、突飛な論を
吐くものが涌て來た。

世と共に推し移ると云ふ眞宗の宗義から打算しても、佛教専門に
すまされぬここに成り、趨勢横文字もやらねばならぬ、耶穌教も研
究せねばならぬといふ譯、佛教を尊信して居らぬ無信仰の私が右の
話が氣にかゝり、畢竟佛教徒といふ人の減じてはならぬといふ煩惱
を起したのである。敢て珠數切たのではなかつたが、他より眺めた
ら改宗したのかと思はるゝまで耶穌教に乗り込だのである。

八 秘密の上の秘密事

親にも兄弟にも朋友にも、秘密の上の秘密で企圖した事であるか

ら、一寸面倒で有た。殊に衣食の資料を勵み出さうと云ふ苦みも副
ふてゐて、毎夜業に筆耕を試みたのである。始めは十二時、或は零
時三十分まで勉強して、五拾錢の筆耕料が關の山で有た、それが
馴れて來て後には七八拾錢の筆耕料を獲ることに成る。けれども冷
飯に澤庵の常食をとることは出來なかつたといふ窮狀購求したき書
籍も意の如く手に入るこゝ叶はず、辛抱は金ちやと云ふ俗諺を思ひ
浮べて辛抱したが、成程辛抱は金ちや貧生を救ふ仁人ありて、衣食
も書籍も不自由なきここにすゝみました。而して埼玉縣の浦和に潜
匿し、横濱の耶穌教教師に教授を受けたのが約三年間、世間には宣
教師の親切に釣込まれ、信者にならねばならぬ事に成たご申す人
もある。私も母が無かつたら其部類に入るので有たのでせふ、こい

ふものは當時私は佛教を寺の商賣品と思つた位で、信仰は零でした。只得意を彼れに蠶食せられぬ様にするには、彼れの内容を知らねばならぬと云ふ心得でありました。

そんな根も何もない浅き心であるもの、親切の言に釣り込まれ、抱き込まるゝに造作はないのである。けれども何うしても釣り込まれる氣にならなかつたのは全く母の手簡の高底である。月に一回は定例で來ました。が月に依ては二回も三回も來たる書簡、その度毎に佛祖の御恩と、天子の御恩とを第一に記し、終りに忘れて呉れるなよの訓誡、暑寒の言の洩れたことは有ても、御恩を忘れるなよの言葉の書き洩しは一度もありませんでした。

九 圍む堅牢と強き繩

母の厚き信仰は、私を佛教外に走らせぬ圍みでありました。母の深き愛情は、私を佛教内に繋ぎたる繩でありました。圍みを破らず繩を切る力が弱かつたのではない。母の信仰と母の愛情が強かつたので、破ることも切ることもないのでした。惜いとて去ること支へた宣教師の手を辭して、某塾生と早變りした。不徳の身を忘れて、耶蘇退治なんて云ふ論文を新聞に寄せて得意然として居たのである、惜いと云つて呉れた教師は、恩を仇で返す奴かと憤つたに相違ない。飼犬に手を噛まれたと、悔しがつたことでしたらふ。私もこんな手返す様な所爲はすまないことである、自ら咎めた事もある。されど信仰を求めたのでなく、教理を究め様とて三年間を費したのですから、義理に據められて信者顔する譯にゆかぬ。

一八
教理を究める目的を達したら辭するより外はない。辭した身となれば師弟の縁を結んだ人の義理に、其人の傳ふる宗教までを信ぜねばならぬ道理はないと思ふ。

私は教理を究めるために師とした人の恩を忘れはせぬ、教師その人を侮る意は毛頭ないが、教理その物を尊む意は更にないのである、耶蘇退治云ふ意氣込みで彼れの穴探しに熱中し、筆に口に全然狂氣の沙汰で有た。何とした我身知らずて有たらふ。顧念すれば背ろ恥かしき次第である。汝は何ものぞ尋ねを受れば、佛教僧侶なりと應じたのである。宗旨は何宗ぞと問はれては、眞宗なりと答へたのである。眞宗の宗義はいかなるものぞといはゞ、眞俗二諦相依の宗義なりと明答に躊躇しなかつたのである。然ふして無信仰の

無頼漢、羅針盤なしの船中にそれとも知らずに漂つて居たのであることを慚愧します。

十 早合點をばするな

思へば思ふ程、母の恩の廣大深遠なることが知られます。他人より言を承はる時は意に落ちないまゝ、早合點をするな、意に落ちるまゝで尋ね返して後に悔の起らぬ様にせよ。母は口癖の様に云ひ聞かせて呉た。その母より聞たこの價値を認めたは某塾に遊んだ時である。塾生の中に、鳥取縣の生れで早合點早呑込みの人が有た。偶ま先生が金魚の餌にする子を購ひ來ることを命じた。早呑込の鳥取生、はいご返辭をすると同時に門外へ走り出た。暫くありて大きな南瓜を提げて歸つた。先生も案外の品を購求して歸りしに驚き、何

二〇
の言もなく不審の面に南瓜と塾生を眺めて居られた。漸くにして先生は徐々口を開て、これは南瓜ぢやないかと問はれたら、鳥取生は別に苦り顔もせず、ぼーふらぼーふらと幾回も繰返して居た。よく聞き質してみれば因州の方言に、南瓜をぼーふらと申すさうです。ぼーふらぼーふら假名の一字、り。との相違、聞き違したのでせうけれども、一字の假名違位といつて、子子と南瓜を同様に見做す譯にはゆかぬ。夫故に早合點、早吞込を警めねばならぬのである。母が口癖の如くに云はれたはこんな過失を私にさせまひための慈悲で有たここに氣付きました。

大黒に貧乏神は追ひ出されと、聞けば懐ろが暖かく成た感じがあれど、大黒は貧乏神に追ひ出れど、きけば身が寒くなる様な思ひが

します。たつた一字の違ひともいへない、一字も違はぬ假名が上下したので貧福の顛倒となる。孝と不孝と一字の有無、忠と不忠も一字の有無、一步の誤り千里の差、すべての事が些細に注意せねばならぬのである。母が常に口にしたる古歌「つゝしみは、あさなゆふなの、ここのはの、かりそめことの、すねにこそあれ」是等もこの邊の消息を洩したものでせう。

十一 寡言にして實あり

軒並べに住居する間柄にて、顔見合せながら物も云はずに居ると云ふ原因を探れば、一言の口先きに有たとの例は少くない。私の母は寡言でありました。その代りに云ひましたことは無駄が無かつたので、今猶取出しては喜ばれます。朝夕の言の葉、些細の事とて

我まゝに使ふてはなりませぬ。その心得を讀みましたのが朝な夕な
の一首、いかにも謹みは此邊にあること、首肯出來ます。和歌は國
詩とも稱して、理屈張つた言論を以て説き聞かせられたよりも、一
首の和歌を以て讀みきかされた方が早く感服の出來る徳がありま
す。

私が和歌を聊か心得る様に成たも、其實感に促がされた爲めであ
る。詩は文章の花なれば是亦師に就て學ばねばならぬと、平仄を並
べ始めたのも同時代である。和歌の初産と漢詩の初産を追想すれば
一人で可笑く思ふも一種の自惚である。同窓の學友に繪畫の熱心家
ありて、君これに題せよと私に見せたその畫は、鼠の柵落し意匠太
だ振つてる。今夜はくと耳を澄まして寢所に在た主人公、バタツ

ト怪しき音のしたのを聞くや、そら柵落しに違ひない今の音ご捕虜
を手にした心地にて寢所を出た姿、四つ匍匐に成た丸裸、犢鼻褌を
尻尾の様に引摺りて居る。片手を柵に掛た同時に肝腎の鼠は逃走し
て御免なされと背を向き乍らちうと泣く所の姿勢、主人公の失望し
た顔付、その滑稽は一瞥噴飯と云ふ出來榮ゆへ、題もこれに相應の
歌を學友の注文に随ふて、

今宵ぞと思ひかけたる甲斐もなく

たゞに思ひのますのみにして

震ひく筆滴を落した。是が和歌の初産である。是は振つてる、
面白いと譽て呉れたは學友ばかり、和歌の先生からは大目玉を貰ひ
ました。なんです是は本歌でない狂歌だ、狂歌をもつて句切る人は

眞面目の歌がよみ難くなる。苟くも和歌を讀む心得なら正しき歌を十分に讀で能化し、成たその上に狂歌も一興だらふ、本歌の道も知らずに狂歌を口にする、その句調が正しき歌に雜る様に成て善きものが出来なくなると、痛棒を喰はされた。只今なら痛棒位に驚かぬ横着坊なれども、當時は横着氣はなかつたから謹んで先生の仰せを守ること成た。畢竟學友が振つてるご譽めたのは、私に取ては先生の目玉ご痛棒に恐怖して震つてるごいはねばならぬ始末でしたから有難くもない次第、可笑きご限りなしである。

十二 和歌の道への初旅

する墨の硯の海は淺くとも

ねにしは深き試みの筆

雪の内に早咲き初て鶯を

まねきがほなる梅の一枝

昨日まで見へし遠山隠るゝは

春のかすみの閉すなるらむ

月が瀬の梅の林の夢さめて

枕あぐれば鶯の啼く

花の顔みせぬ隣の梅も猶

惜まず薰りうつしける哉

おもしろき文を披きて一卷を

よみ終らぬに明る短か夜

青くともゆめ悔るな梅の實の

おちぬ力はこの内にあり
をしなへて緑りとなりぬ夏の山

みな常盤木の色をなしつゝ

若竹をいともたのみにおもふかな

老ての後の杖にせばやと

月とのみ思ひし窓の明りこそ

朝の五つの空にありけれ

人ふたりよれば暑しとつぶやきし

聲もしづめる池の秋風

音のして寂しきものは櫛の實の

落てころがる秋の夕暮

友だちは皆ちりはてゝ窓の面に

たゝ萩の葉の戦きをぞきく

花すゝきさすがに秋の印さて

山のかげにも穂をみせにけり

すさひたる藁屋の軒の塵塚に

聲はうもれず蟋蟀の鳴く

谷深き山の落葉もさとかはに

みちの錦となりもこそすれ

すりおきし硯の海を今朝みれば

すみうすくゝと氷そめけり

霜の花さく冬草にふりかゝる

玉の霰は實とや云ふらん

冬立つと云しるしにや我庭の

のこれる菊に霜のおきそふ

ひまのなき脚隠しつゝ水鳥の

うき世を水に忍ぶかしこさ

手入せずとも宜しいといはれて、北叟笑して居たのである。初産の歌では大目玉をもらひ大痛捧を喰たが腹帯確かり締た二度目からは安産の仕合併、平仄の方に於ては痛捧を貰ふ所へも行かないのである。

十三 詩道の初旅是より

初旅の詩は平仄に苦み孤平禁に惱みし結果、甲の先生に添削を請

ふ、所が五言絶句二十字中四分の一助かつて居るご云ふ有容。それを甲の先生に添削して頂たご云はず、作つたまゝご云ふ顔付で乙の先生にみせたら直ちに朱を加へて下さつた。手に取上てみれば甲の先生の手にて生き残つて居た四分の一を削り改められたのである。畢竟私の原作は影もないここに成て仕舞ひ、甲乙兩先生の合作が出来上つた譯である。自分乍らこれでは氣の毒なものだと、自分が自分に同情しました。詩友の話聞いてみると、三百首位作らねば詩にならぬご云ふもあり。そんなに數ばかり勉強しても上達するものではない、能く鍛錬するに限ると云ふもあり。古人の詩を多く讀むが宜しいと云ふもあり。區々の説に惑ひましたが、何うやら第三の説が私には尤もに聞き取られたから詩集を讀で、解し兼る點を先生に質

三〇
問もんしました。問もんふは一時いちじの恥はぢ、問もんはぬは末代まつだいの恥はぢと云いふことを昔むかしから申まをすことに相違さうかないと感じました。こんなことを問もんふたらそんな事ことを知らぬのかと笑わらはれるであらふなご、とかく知しつた振ふりをして問もんはぬ所ところより生涯しやうがい恥はぢを搔かくことになる。旅行りょこうしても知らぬ道みちは子供こどもにでも問もんふを恥はぢさはせぬ筈はずでせう。學まなびの道みちの初旅はつたび、何なんの遠慮えんりよが要いらふ、尋たづぬべし。母ははが常つねに意いに落おちるまで尋たづねて後のちに悔くみの起おこらぬ様ようにせよと、申まをされたのも此所こゝちやと思おもひました。私わたくしは母ははの寡言くわげんにて格言かくげんをのこしたるを喜よろこばずに居かれないのである。ですから漢詩かんしに就つても先生せんせいも困こまらるゝ程ほど質問しつもんしたのである。

十四 根ねを堀ほり枝えだを叩たたいて

根ねを堀ほり枝えだを叩たたく様ように尋たづね、一詩しに二三二三字じの添削てんせきにて事ことすみ出で來き

た詩しは、

梅花馥郁月朦朧	月與梅花似競工
試唱暗香浮動句	黃昏又趁古高風
縈白繚青汎上霞	櫻塘李岸龜春加
漁夫亦是風流者	不網游魚網落花
美人馳逐幾螢飛	穿柳穿松如織機
半月沒山山路暗	螢光好照美人衣
遠天明月到吾居	正是蚊多難睡初
貧士草堂無一物	敲詩幾搜腹中書
桐樹已癯芋葉肥	月光清處斷塵機
秋園唧々蟲何急	漫織幽愁不織衣

一小囊贏三百錢 去探殘菊小春天

悠然可取新醪醉 城野籠語鶯已傳

寒堂亦是有詩媒 送臘迎春更樂哉

雪裏清堅君子竹 風邊淡泊美人梅

まあ此位にして置ませう、澤山出すと縊縷がみへて来て、恥を隠し難くなる。漢文も課題に随て少しづつ綴りてみました。漢詩に比して幾倍の勞を覺へます。錯雜なき文章とみらるゝ迄には、數年の後で有た故漢詩に並べて此に並べ擧ることは止めて折を得て書てみませう。

十五 學問の師と乳の母

東西兩洋の學問に就て恩を蒙りた先生を擧れば、小山春山先生、

小野湖山先生、中村敬宇先生、福澤諭吉先生、加藤千浪先生、市河湫村先生等にてその他先輩の恩人鮮少ならずである。佛教の宗乘餘乘に就て指南を受たる恩師は、後に至りて擧てみ様と思ふのである。東京游學中是も恩のある一人なるが、三年間月に四五回も逢ひ乍ら、語り合乍ら舊知なることを知らなかつたのである。或る冬の夜でしたが寒いねーと言葉かけたら店のお婆あさん、お寒ふ御座いますねーと合槌打た。その語を續けて云ふ様、この婆あがお乳を擧てお育て申した方が雪の降る國へお引越なされたので、平生とても忘れませぬが冬季の寒さになるご雪の國を聯想して思ひ出します。貴生はお國はごちらで御座いますこの尋ねに、私も雪の降る國の者よご云つたら越前でありませんかと更に尋ねた。よく當つた、越前

だよご答へましたら私の顔に穴のあく程凝と見詰た揚句突然、右京様で御座いせんか、此一問に私は吃驚した。右京は私の幼名である。幼名の右京を知て問を起したお婆あさんは何ものであらうか。不審が起つたけれども、私の幼名に相違ないのであるから問に應じて小さい時の名は右京さいつた、お婆あさん何も云はずに泣き出しました。薩張何だか分らぬ私も急に其場を去り難く、暫く泣くの見聞して居た。や、暫くしてお婆あさん涙を拭ひ乍ら昔物語を始めた。この婆あは貴方にお乳を舉た乳母で御座います。乳母の菊で御座います。貴方はお覺へもない筈、五つのお歳にお別れしたのです。お別れの時にはお名残惜ふてお迹を追ひ、も一宿くと熊谷宿までお慕ひして涙の内に泣き別れ、御様子聞度と思ひましても今

日の様に郵便のある時節ではなし、三度飛脚といふものに便りをし、半年餘り小一年も経ねば手紙の往復六ヶしき時代、一二回は御返辭を承はりてそれを樂みに致しましたが、身の不仕合より北海道に移住し、十年餘り彼地に居乍ら此所に移住して居ますご申上もしませんが、全然で音信不通なるは當然で御座います。貴方の御両親様も婆あは死んだものと思召たであります。北海道にて少々都合よくなりまして、五年前に東京へ歸り細々乍ら斯様に紙商して居ります。貴方様にも三年に渡り御用を蒙りて居りつゝ、その長い間お乳を舉た右京様を知らずに居ましたと、再び泣き出しました。私は豫て乳母の菊の事は朦ろ夜の月影の如く幽かに覺へて居ます。抱かれたり負はれたり我儘云つて困らせたことも逢ふて物語りを聴くこ

思ひ浮へます。されごこんな所に再會するとは案外にていよく、因縁ある間柄に相違ないと舊恩を感じました。

左様か乳母の菊か奇遇だねーと云ふ下に何ごも云ひ知れぬ感情あつまりてほろりとさせられた。私の父は私が十二歳の時亡くなりて今は母の慈悲に温められて居るご聞かせたら、やつと乾きか、つた涙痕を又復河の如く流して云ひました。あの御氣性堅き御方様、御身體はもとより御丈夫ではなかつた。それでは御早世でありましたねー貴方が十二のお歳ときけば、四十二歳の御逝去で御座いますねー。流石に彼れは私の父の年齢をも忘れては居なかつた。かゝる再會が一層深き親みの端緒と成て洗濯物を始めとして、總ての事を世話して貰ふ様になりました。私は一回菊を私の國に伴れて行て、母

にも喜ばせ様と思ふてその旨を母に謀りました。母も非常に喜んで成るごごなら菊を生涯此方に養ふて終らせ度との希望を申して來ました。母の希望を菊に傳へました時の菊の喜び比類なきものでしたから、私も是非一日も早く母と乳母この喜びを一所に集め様ご心掛ました。それこれする間に一年を経ましたが思ふ様にならぬは世の習ひ、乳母の菊は不治の難症にかゝり五十六歳にて命終しました。

千歳てふ菊も常なき風吹けば

霜ふらぬまに早枯にけり

五十六と申しても、白髮一筋みへるでなし、四十六と云つても本當になる程の顔付で有たのです。蓮如上人の御文を拜讀してみれば、今の時の定命は五十六歳なりと仰せられてある。上人の御在世

に於ての定命まで存つた菊の身と思へば決して早世ではない。けれども國許へ伴れて行て、母と共に喜ぶ顔を樂み度と思つた私の欲望遂げられなかつたを悔みはしましたが、私自身の無常を何とも思はず、氣も付かずに居たのである。

十六 蜂の巢の無常觀

「蜂の巢や知らぬ昨日を危なかり」と云ふ句がある。昨日この樹蔭に午睡して快く夢をみた。今日もと思つて寢臺を移し、横臥し様としたら一疋の蜂がふんと來た。團扇もて拂へば續いて來た。蜂の數夥く成たので睡る所ぢやない恐怖し乍ら仰向てみれば古松に古穴あり、蜂は巢を造りて居る。出て來るも道理、無数の蜂が屯集して居るここが解つた。昨日此所に二時間餘も午睡したのに、能うもさゝ

れなかつたご身の毛彌立つたときの意を讀だ十七文字、いかにも面白き句と思ふ。

私がそれである他人の死に接しても、無常の蜂の襲撃で有たのを知らずに午睡して居たのである。二時間や三時間の夢ではない、幾十年の長時間よくも無常の蜂にさゝれなかつたと氣付いた時は、知らぬ昨日を危なかり、決して餘所事に見ては居れぬ。その翌年には西南戦争云ふ内地の騒動、是は古松古穴の比ではない、私に無常を知らせて貰ひましたここは多大で有る。蜂のさすばかりが無常ではない、多くの人の死するばかりが無常ではない。明治維新の大功臣が大逆賊と呼ぶるゝここに成た。是亦目立つた無常の一事である。今日より回顧し追想すれば、乃木將軍の殉死も、明治十年の戦争に

四〇
孕んで有たらしい、あゝ無常／＼無常ならぬはない。昨日は今日に移り、今日は明日に轉ずる、これ無常である。去年は今年に移り、今年は今年来年に轉ずる、は無常である。咲た花は散り、出た芽は枯る春より夏へ、夏より秋へ、秋より冬へ、冬より春へ移り換つて行く是亦無常である。お嬢さんは新婦に、新婦は終に後室ごなる。

十七 善知識を求る行脚

無常に感じた私は、學理に究め様ざしても安心出来ませぬ。後生の一大事である、なんでも眞の善知識に遇ひ度ものと思ひ立ちました。今日出立し様と云ふ日がない。偶ま加賀山中の温泉に入湯をすゝめた人の有たを幸ひに母の許可を受け、一週間長くも十日間に歸る顔付にて居れど長旅する心で出立した。山中にて母に對する

書翰を認めた。その内容は信もなくて人に信をとられよごいふは、物をもたずして人にくるゝごいふ如し、人を承引すべからずの御教訓を引き、不淨説法の大罪を恐るゝ故眞の善知識にあひますまで歸りませぬと、涙を拭ひつゝ、心強くも筆を取りました。

母の返書は、己に山中を出立せんとする一時間前に私の手に届きました。三界の大導師となるべき身の上、その心得ならではならぬ、老たる母に氣を掛けず、眞の善知識を求めよこの親切を記して有た。涙を拭ふては讀み、繰返すこと再三再四有難いやら嬉しいやら郷里の天に向ふて合掌しました。それより加賀に三ヶ所、能登に一ヶ所、越中に四ヶ所、越後に三ヶ所、信州に一ヶ所、十二ヶ所に於て二百五十日餘、東京に出まして舊知を訪問した時日が、一ヶ月何

の得る所なく起るものは煩惱ばかり、腹が立つやら悲しいやら、母を思ひ弟妹を思ひ、麻を亂した様な心に成た。あゝ何と云ふ意氣地なしであらう、眞の善知識に遇ふまで歸りませぬと、母に宣言したのではないか。母からは其心得ならではならぬ、老たる母に氣をかせず眞の知識を求めよご命令を受たのではないかご、自問自答に氣を引立、東京を發して此所に三日、彼所に五日ご巡り回りに飛々に試問の時を移し、三河に入て三ヶ月餘、二三の名師に教へを授かつたけれども煩悶の去らぬも道理、信心製造の資本を探して居たのである。京都に至りて知己の指圖に始めて知たは、博多の七里恒順師である。聞くなり咄嗟に大阪より博多へ航し、萬行寺に飛込んで師に初對面するや、あんたは耶蘇退治の御大將な一と、突然師の云は

れたのには驚きました。佛典に明かなる事、宗餘乘に博涉せらるゝ事は師に於て當然ご誰も許すが、漢籍でも洋書でも翻譯に就て片はしから新板物を通覽し、新聞も要所／＼を閱覽し、十數年前の事を皆記憶して居らるゝと云ふことを聞て居た。半ば此噂さを疑ふた私には、疑ひ晴てその噂さの虚ならざるに目のさめたは、突然云はれた師の一言である。

三年間師の膝下に教化を受ましたが師には特別此所が優れてあると押へて云ひ難ひ所に特長があるのです。其は何ぞと云ふに強ひて名を施せば信徳であります。自信教人信の徳であります。自信教人信の徳に化せらるゝには學問の大刀もいらす、雄辯の大砲もいらす無手で宜しひのである。渡さうごいはる物を取らふごするには戦ひ

もせねばならぬ、けれども與へ様とある親切に對して、戰ふて取らふご向ふものはない筈。他力回向の信心は與へ様との親心、何うして自力を出されませう、自力はなれて他力に歸する程、骨折なしに徳の得らるゝことはありませぬ。私は博多の恩師に別れて歸るご間もなくでした、兄さん印度へ行きますご違乞に來た弟に對して、私も同道し様かなー、と戲談半分の挨拶が本物になり、航海の準備したことも昔話となりました。即是無常である。

五ツ年の若かつた弟は五十五歳で、今より二十七年前に國換して仕舞た。その時の彼れの辭世の偈は

終無知妙有 今日人眞空 可仰彌陀力 長時區報窮
師教已分明 平生業事成 山河今一革 此處涅槃城

私は韻を次て追悼の意を表した二首は

昨有紅顔在 今爲白骨空 弟先兄後恨 雨淚奈無窮
從一達三明 神通自在成 現身眞耐羨 入彼涅槃城

十八 母子顔を見合した時

弟兄手を携へて印度に航するまでは無事で有たが、歳餘にして弟は二豎に襲はれて病院に入り、客愁に病苦を加へ悲しきことでした。私は虚弱の身乍ら亞刺比亞、埃及、土耳其、佛蘭西、英吉利等の國々に遊ぶことを得たは不幸中の幸で有た。海外漫遊のことは西遊見聞記に委く載せ、六十六年夢物語にも書てあれば略省します。既往を回想すれば夢である、無常の世であることを深く感ぜられます。歸朝の當時、待兼て居られた母は、武生町まで私を迎へに來て

下されたのである。旅館に顔を見合せた時には双方に言葉なく、只あるものは涙でした。其は嬉し涙です、他人は可笑かつたでしよう、他人の笑ふも嘲るもそんな所に斟酌はして居られなかつた。

母子は腹一杯、嬉し泣きに泣いたが涙の種は盡きませぬ、もうお立ちに成て宜しからふと歓迎車の方から注意を受けて、多数の車を列ねて旅館を出たのである。因縁と云ふものは妙なもので、旅館の米莊は維新時代、前武生藩所屬に就て一揆騒動の起りし際、多くの土民に代りて一人所罰の任に當り、一命を刑場の露に化した義俠者堀江某の家である。その義俠者の爲めに碑銘を書たは私である。それとも知らずに歸朝の途次、軒を並べてある旅館の中に於て他にゆかずに因縁ある此家に腰を下ろし、圖らず往事を偲ぶことでした。寺に

着てみれば私の留守中、長の月日私に代りて母を守護して呉れた妻を始め、親戚故舊は笑みを含みて迎へた。中には笑と涙と共に漏したものの少なくなかつた。愛犬はふん／＼鼻を鳴らして足許に踊り上り言語は分らねども御無事に歸朝下され嬉し御坐います、待て居ましたと云ふのでありませふ。畜生さへ主人を忘れぬ情があらわれてみねるに人たるもの忠孝の道を忘れてなからふかと深く感じたことである。

十九 佛門警鐘著述の縁

私の歸朝した頃は外國に行て來たものと云へば田舎ですから、珍らしいものゝ一部に算へて居た。いやはや二束三文の品物に高價を拂つて購求し様ごなさるので、お氣の毒にもあり恥かしくもあり、

恐縮千萬の次第で有た。元來性質虚弱の私が、洋行して馴れない風土に彼地此地したものですから、財布の貧弱は勿論の事身体も貧血となり暑寒共に障り易く、そればかりでなく神經痛にて歩行に自由ならず。五丁や十丁までは徐々脚を運べるが、夫以上は車駕の力によらねば何所へも行けないと云ふ厄介者。それを彼是いはずに人力車、或は肩輿を以て招待を蒙むること、不肖の身に餘る仕合、暑ひの寒ひのと申して應ぜずには居れませぬことです。然ふして到る處優待を受け、恥かしくもあり、勿体なくもあり、敢て調子に乗つた譯でもないが、印度の僧風より釋迦佛陀御在世に考へ及ばし、又一面には宗祖親鸞聖人の御一生に思ひ競べ、今の世の僧風の餘りに俗化し過ぎ、悪風醜態に流れた様な感じが深り成た爲、佛門警鐘とい

ふ一冊子を編みました。所がそれが僧侶諸氏の感情を害する端緒となり、彼奴は獅子身中の虫である僧侶にあり乍ら、僧侶の内幕を打開けて世間に發表するなんて不届至極である。生かして置けぬと云ふ議論沸騰し、それには野次馬も附隨したのでしやう、八釜といことにて成て来て、夜分の演説や説教には角袖巡查が警衛して下さつた程である。

言ひ過ぎ勿物喰過ぎ勿口よりは

病ひが這入る禍ひが出る

古人我を欺かず、謹むべき事と肺肝に銘じました。私の中心いばかり慷慨悲憤を抱て居ても、口にせず筆にせずにして居れば彼是申す人はないのである。おこまがしくも、心中にある處の有丈を筆

にして、警鐘なご、怒鳴たものですから衆耳に障りましたのである
私が短氣の性質癩癩強きを承知して居た母は、不倒翁を私の机上に
置き語に堪忍せねばならぬことを教へられたのである。私が平生こ
の教訓に遇ふて居なかつたら、定めて衆僧を相手に取て修羅の憤火
を放つことと有たらふ、是亦恩の大なる母の昔を偲ぶ一つである。

二十 母の注意の不倒翁

宛轉反側。未曾不起坐者。即爲不倒翁。翁也無手無足。固非具
官支者。故不敢喜。不敢怒。不敢哀懼焉。然搏而不倒。擲而不
倒。隨轉隨起。意不倒者。蓋其中心修堪忍之德者乎。將蓄千挫
百折不屈不撓之氣乎。今之學者。有手有足。固具官支。能知
喜。能知怒。能知哀懼焉。然而不修堪忍之德。無挫折不屈撓之

氣。一蹉躓之下。廢棄數年之勞。天下比々皆是也。

牟尼氏曰。忍之爲德。持戒不及矣。不倒翁守此言。如具官收
者。而今之學者。不及一不倒翁。悲夫。

この不倒翁説は母が心を籠めし机上の不倒翁に對して、何ぞ一語
を記せよと命じた時に製したものである。東照公の遺訓に、堪忍は
無事長久の基と云はれたも、佛陀の戒經を會得せられたる故であら
ふと思ふ。何事でも理屈云ふより實行するに限る、實行せぬ理屈は
何にもならぬ。俗に之を屁理屈といひます。

廿一 堪忍者實行の實現

私の母は堪忍の實行者で有たことを例證してみませう。私の寺に
十二歳から十八歳まで、七年に亘りて使ふた男がありました。始め

二年ばかりの間は寢小便が上手で、一夜として洩さぬはないのに母は怒つた顔もみせず、一聲咎めたこともなく、食膳の時などに徐々云ひ聞かす様、お前冷度所に寢て居るは心持が悪からふ、夕飯には成るべくお茶を呑ぬ様にしたがよからう、水氣を呑むと鹿相が出来るから呑みたくともこらへなさい。蒲團は代へては洗ふけれど雨の日には乾きが遅き故、漸次冷々して心持がよくなからふけれども、堪忍して呉れと母の方から小便垂れの男に謝して居たのである。只今の様に賣藥の廣告も知れない時節、彼地此地聞き質しては藥を求め吞ませました。それこれする内藥の効能も有たてしようし、年も重ねたので注意も深く成たのでせう、寢小便は止まりました。今は孫を持ち彦も顔出しさふに成た内に老を養ふて居ます。來る度毎に母

の肖像額の下に跪き、奥様のお慈悲にはと云ひかけては涙を流し、三十分位はいつも獨語に昔を偲び恩を謝するが定りである。

私の母は明治癸巳年、六月十五日往生の素懷を遂げ形骸は茶毘の烟に消へましたが、心靈は消滅せず、今猶活動して居ます。私の記憶して居る丈でも、母の申された事のあるために今日徳を得る數が少くない。是が全く母の生命であれば、母は死にませぬ。生きて居ると申して差支なからふと思ふ。母ももとから堪忍強い慈悲強き人でもないのでしたらふけれども、練習の力が地盤を爲して、動かぬことに成たのでありませう。

廿二 何事も練習による

何事も練習による、ご云ふことは誰も知らぬのではないが、怠慢

に陥りて功を奏しないのである。体育に就て某醫學博士は斯ふ云はれた、一体生理と云ふことは一の機械である。けれども是は只の機械ではない。働きを持って居る機械である。であるから自分の身体を上手に働かして完全にする事の出来る性質を備へたものが体育である。されば体育には練習と云ふことが必要である、練習に依て生理を變化させるのであるから、練習によりて生理、即機能を發達させた例は、昔希臘の『ミロン』はオリンボスの競技の際、彼廣大なる競技場に於て雲霞の如く寄集りたる見物人の前で晴がましく、悠悠に見揚る程の大牛を兩手にて指し揚げ、競技場を一周して非常な喝采を得たごある。

是は『ミロン』が幼少の時から常に牛を伴んとして遊び乍ら、牛を

兩手で持上げて一歩二歩と歩く練習をして居たからだそうです、練習の積つた結果、他人の及ばぬ所の事が出来るのである。いかにも左様だらふ、曲馬その他の藝術を見ても素人からは吃驚するばかりであるが、彼等に於ても生れ乍らにして彼様な事が出来るのではない。練習を重ねた結果として、他人の目を驚かすのである、されば何事でも練習さへすれば、遅速の差はあるも目的に達しないと云ふ道理はなからふ。精神一到何事不成と申す語も、かゝる場合に忘れてならぬ所の文字であると思ふ。障害物を飛越へるに於ても、最初は繩張三尺の高さも越へ難きものが、練習した後には六尺を飛越るのが心配なしになる。私の様なものですら壯年時代には、高さ二尺五寸六尺四方の石を飛越たことがある。最初は六七間も隔てた所よ

五十六
り疾走し來り、その勢力にて飛越んごしたたが石の側まで來るご越難く止めて仕舞ふと云のである。毎日幾十回宛友達と飛越を繰返したご最後に疾走もせず飛越へるごが出来た。それに進むまでに疾走の場所五六間が三四間に、一二間に練習を積んだのである。練習に依て大牛を手で指し挙げたり、大石を飛越るは形の上のみゆる事ですが、目にみへない耳に聽へない心の上に於ても、練習の必要なる事を忘れてならぬのである。

つらからふけれども辛抱しなさい、今日一日だ、成程この語を心に銘して一日づつ送りて行くと、到頭つらくない所まで到着するのであります。今日一日く是が練習の行程である。天窓から三年の五年のご云つたら六かしい。長く向ふをみると辛抱出來ぬと云ひ切

らねばならぬ事でも、今日一日ごいはれてみれば辛抱出來ぬと云ひ難い。一日送りて一夜明ればやはり今日ご云ふべき一日であるから又今日一日ご練習が出来る。

習慣は第二の天性と申してある。漸々練習が積りて行くご、辛抱が常習となり知らず辛抱が出來て、辛抱すると思はずに辛抱するから苦みなし。斯様に練習なるものは功のあるものご解つたら、身分の高下によらず、性質の賢愚に拘はらず、誰も彼も練習の必要を忘れず有形に無形に練習して進化の世に伴ひ物質文明と精神文明と併行して、愉快の活動いたさねばならぬ、私の母は有形にも無形にも、練習を忘れずに居られたので私等の幸福で有たごは言語に述べ盡せぬごである。筆墨に書盡せぬごである。此世を終るま

で練習を續けました、その手本が無かつたなら、私の様な徒らものは疾くに瞋恚の炎で身を焼き亡ぼすか、憍慢の刃で身を刺し殺して仕舞ふのである。心を廣くすると云ふのも矢張練習から成るのである。心が廣くなれば小事にこせつかぬばかりでなく、大事にもまごつかない。ですから平氣に居らるゝのである。平氣に居るご云ふは何一つ自分で構はず、平氣の平左衛門と申す世諺を學ぶことではない。其様な放任主義では却々平氣に居るごは出来ない。

廿三 物事に拘泥せざれ

平氣と云ふごは、物事に拘泥せぬことである。拘泥するご云ふのは、あんな事をしなければよかつた、何うしたらよからふと過ぎたる事をいつまでも繰返し／＼氣に掛けて、手に取る物も手につかぬご云ふ如きである。

竹影掃塔塵不動。月輪穿沼水無痕。

これは洪自誠と云ふ人の語であるが、實に面白き教訓と思ひます。竹の影は塔上を掃ふけれども、塔上の塵は動くことはない。月は沼の中に在れども、水上に月の痕迹はのこらぬ。とにかく人間は昨日に葬り、明日の事は明日と爲して過ぎし事に／＼せず、來らぬ事では取越し苦勞せず、臨機應變、活殺自在、縦横無碍の態度を取るが宜しいのである。斯様に既往將來の前後に平氣に居る丈、現在にはその代りとして全力を注ひて勉強せねばならぬことである。

底樋なき淵やはさわく山川の

浅き瀬にこそ仇波はたて

六〇
古人は謳ふて居る。いかにも底の知れないと云ふ様な深き淵は、いつも靜穩であるが浅き川になると波の音や水の響きが噪がしいものである。大人物は胸中深き淵の如く、物事に狼狽せずこそしくしない、故人では西郷南洲。山岡鐵舟、原坦山、福田行誠、七里恒順の様な人物、何れも貫目ある態度いかなる大事に逢着しても平氣で有たことは衆人の知る所である。小人になると左様にゆかぬ。心中常に大小の波瀾絶へ間なく、ざわ／＼して居るものである。

廿四 宗祖親鸞聖人をみよ

我宗祖親鸞聖人の如きは、最も竹影塔を掃ふて塵は動かず、月輪沼を穿つも水に痕なしの語に相當した御一生である。その一二を拾へば、越後へ御左遷の時仰せられた御言葉のいかに平氣でいらせら

れたかに感ぜぬものはなからふ。大師聖人若し流刑に處せられたまはずんば、我亦配所に趣かんや、若しわれ配所におもむかすんば、何に由てか偏鄙の群類を化せん、是猶師教の恩致なり。とても並々の者の申されることでありませぬ。配所に起臥したまひながら、平然として信仰の鼓吹に勉めたまふ御態度は、たゞ欽仰の外はない。平氣主義の人にはいかなるものにも調和が出来から、畢竟敵も味方もありはせぬ。所謂仁者に敵なし、の風情であるもの。平氣主義の人は赤裸々で莊りがなから、化の皮の剥る氣遣ひはない。多くの人は種々に自分を飾り立て、その心底に名利を貪る念が強いのである。莊飾は剥るに定つて居る、飾りなしに愚は愚のまゝに他人の面前に出る位氣樂なことはないのである。十錢の價値をもつて

居るものは十錢に賣るに心配はない。十錢の價値の物を廿錢にも三十錢にも賣んごする所から種々の策畧や莊飾が要るのである。勞して功なき飾りを脱して、平氣に居るのが得策である。昨日を繰返さず、明日を計らはず、只今日の一日を勉強するに限る。左様は云ふもの、昨日も明日も離縁して、他人とみる譯にはゆかぬ。今日も暮て夜が明くれば昨日に属し、昨日も今夜が明た時今日と云ふ日になるのである。故にいよいよ今日の一日を勉強せねばならぬ。其勉強が積り／＼て三百六十五日を経た曉に過ぎたる方を顧みれば立派な勉強の一年が出来上りて、今日一日の基礎をなして居ますから平氣に居らるゝ道理である。斯様に申すと咎める人があるかも知れない。そんなに平氣／＼と平氣に成て居られるであらふか、世に生きとし

生けるものに斯う仕たい、彼様に成り度といふ望みのなきものはない。人間以下の動物や植物にもそれはあるであらふ。けれども只今証明することは出来ぬが、人間に於ては古今に渡りていかなる人も望みなしと云ふものはないであらふ。

廿五 無限の生命を望め

いかなる人でも望みは皆ある。一生は盡れども希望は盡きずと云ふ金言あれば、相違ない事である。若し望みなしと云ふものあらば絶望である。絶望は死である。智愚善悪賢不肖に依て多寡の相違はあらふが、生きて居る間に絶望はない事必定である。顔回の如き有名な無慾評判の人でも、一簞の食一瓢の飲は絶望しなかつた証據あり。「ダイチゼニス」の如き世をすてた人でも、桶の中に居て「アレ

キサンダー」大帝が何ぞ望みはないかと問はれたのに、我前に立ち日光を遮りければ困るから退いて欲ひと望んだと云ふことである。然うしてみると、いかなる君子聖人も豪傑智人でも、最う望なしと云ふことは出来ない。一寸一服と煙草を吸ふ位な浅き望みもあれば、一國の安危を一人にて引受んと云ふ深き望みもある。望みには大小厚薄淺深高卑千差萬別あるも、望みこいふ意に至ては同一なりと申してよからふ。之を更に分別したら、名望と利望である。いかなる馬鹿でも利巧ものといへば莞爾として笑ふ。馬鹿といへば怒ること金錢が欲いからと答へませう。これが利望といふものである。何故に金錢が欲い、と問はゞ金錢なければ生きて居れぬ、と答ふる

でせう。然れば利を求る心は、生き度と云ふ心に相違ないのである。斯様に名利の二を望み求る心を今一つ時間的空間的に配當しますと、名の方は自己と云ふものを廣く知らせ度と云ふ望みであるから、空間的に自己を發展せんと望みと申すべきである。利の方は時間的に自己を永續せんと望みと申すべきである。何れも畢竟無限の生命を得度と言ふ望みに歸するのであることは間違ない。生命と一口に申しても分明ならぬ様ですが、生命には二様の見解がある一にはこの肉體が活動し續て行くのを生命と稱して居る。二には三十年や五十年にて破れる肉體でなしに、此天地間には且廣大なる生命の潮流がある。我等肉體の生命もその中の一波瀾である。大生命の顯現であると言ふ見解です。世人の多分は此一大生命あることを

認めず、肉體上の、川柳に所謂、盃から盃にうつる五十年を生命とみて居るのであるから、何を望んでみても十分の満足を得られぬばかりでなく、不平不満不足だらくに一生を終るのである。

たとひ望んだ金銭は得られても、望んだ位に登りても、他人から羨望せらるゝ名利の二つ乍ら握つたものでも、

思ふこと一つ叶へば又二つ

三つ四つ五つ六つかしの世や

自身に取ては矢張不満足である。或は無一文の時代より巨萬の財を持つ様に成た俄長者の心中、亦不満足の點が多くあるらしい。近來成金と呼はるゝ連中には金銭に酔ふて、常識に外れた亂暴な散財をするものもあることを聞いた其爲めに金銭が欲しかつたかと問は

然りと答ふることは出来ないであらふ。やはり何處まで行ても苦しきがある。眞の平氣に居る身に達せぬからである。眞の望みは無限の生命を體得する所にあるので、五十年や六十年の短きに満足出来ないのである。たとひ百年千年を経るとも満足に達すること不可能なるべし。

廿六 如來の慈懷に入れ

無限の生命を體得するまでは、肉體の上に百年二百年経るも駄目である。乃て時間的にも空間的にも無限の生命を得た時が眞の満足の時である。そんな生命が何處にあるであらふ、遠く探り求るに及ばぬ、近き眼前みなそれである。机上にある筆硯にもある、山にもある、河にもある、森羅萬象物質も精神も一一皆是天地間の大生命

六八
である。眼を開て山河をみる事が出来、耳に依て音聲を聴くことが出来るものなら、生きて居るのですから大生命を否定することは出来まい。それに之を知らずに煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界に毎日そらこと、たわことに浮身を棄して居るのである。それに對して爰に念佛と云ふ調法なる大教がある。私等は此念佛の大教によりて、大生命を知ることが出来るのである。念佛は無得の大道である。念佛は光明無量である。念佛は壽命無量である。實に無限の名譽、無限の大利、無限の大生命である。私等は有限の肉體五尺の生命を捨て、無限の大生命に入らねばならぬのである。無限の大生命は如來の本願である。無限の大生命は如來の慈悲である。如來の慈悲に入れば無限の大生命を得たのである。如來の慈懷に入るとは畢竟南

無阿彌陀佛に救はるゝことである。

本願圓頓一乘は

逆惡攝すと信知して

煩惱菩提體無二と

すみやかにとくさごらしむ

彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になるなり、南無阿彌陀佛の主になることは信心をうることなり。信をわたる人は目も南無阿彌陀佛鼻も南無阿彌陀佛、六字に身をば丸めたるなり。此上に何の不足ありて他に望みがありません。

無得光如來の名號と

かの光明智相とは

無明長夜の闇を破し

衆生の志願をみてたまふ

底のある小希望は一つ叶ふても、又一つくと満足がないから平氣に居られぬが、底抜けの大希望を他力に依て獲得すれば、大満足です。平氣の心にならるゝこと勿論である。此様なお話の出来るも皆是四恩の高底であるが、私に取ていつも乍ら母の恩なりと申さず居れぬのである。

廿七 自力修行者の苦辛

私が一にも母、二にも母と、母を思ひ出し母を云ひ出した。その母は六十七歳にて往生を遂げました。四十年を経た今日、忘れたふても忘れられまなぬ。其様な愛欲の深きものなら悟道へ進むこと叶

はぬと有たら何としませう。他力の教に慣れて、いつも其事を聞流すので御恩を仰がれませぬ。此に自力修行の昔話を取出して反省致しませう。一人の修行者妻子を棄て山に入り觀念にかゝりしが。五歳になる男兒を忘れられぬ。定めてお父さん〜と探すだらふ。たとひ二世の契りと申しても妻は忘れ易いが、血肉を分けた兒は忘れることが出来ない。五十日餘を経て家に歸り來た。無斷家出に大騒ぎ、泣き草臥た所へ歸つたのであるからその喜びは喩ふるに物なしと云ふ世諺に洩れない。それ御酒をそれ御肴をと、百事を忘れて御馳走の準備にかゝれば、酒は一杯飲まふ、下物は此處にあると云ひつゝ、愛兒が踊天躍地の思ひにて、お父さん何處へ行てたの、最う行くのはいやよと膝に上り、脊に負はれ居る所へ酒が出た。するご

突飛な兒の聲、キヤーと云ふに驚き臺所に居た妻が走りよれば、兒は血に染みて蟲の息き、貴所は血迷ひしましたのか、可愛兒をば何うして殺しなかつたのですと詰問した。兒は可愛ければ自分の後生には換へられぬ。迷路をはなれて悟道に入り度いので無斷家出をして観念をこらしたる五十日、眼にちらつくは此愛兒、亡くして仕舞へば眼にちらつくことはなからふ。下物は此所にあると云ひしは此愛兒ださびくく動く死兒をみつめ、一杯の酒を妻にもすゝめ今日お前とも縁を切る、轄と成た兒も此通り何れへなりとも嫁し付て呉れと、再び修行の道に走りたのである。私は考へますその修行者が眼にちらつく愛兒を亡くして、其後忘れられたであらふか、亡くせぬ前より亡くした後に一層恩愛を増したに相違なからふと思ふ。殺

して仕舞へば無き兒である。忘れられると思ふたは當外れ、愈よ眼先にちらつき修行の邪魔に成たことでせう。私も母が往生した後は再び母を口にせぬまで忘れられるかといふに、却々左様にゆきませぬ。母の存不に拘はらず私は母を忘れられませぬ。

廿八 中江藤樹先生の孝

私は中江藤樹先生の傳を讀だごがある。流石に近江聖人と稱する程ありて、世間並の儒者でない。近江國高島郡小村に生れたれども、野鄙の習ひに染まず、九歳の時祖父吉長が自らの嗣とせんと請ひてその在所伯耆に伴れて行たのである。祖父は自分が手筆に拙きを悔い、勉めて此子に學ばせたるに、その書の美なること衆人を驚かした。十歳の時伯耆の大守加藤公伊豫大洲に轉封せらるゝ事に成

て、共に彼所に移つたのである。十三歳の時祖父賊を打事あるに少しも恐るゝ氣色なく、祖父の命を受け賊を捕へんとするなご、幼時より志氣勝れて有たこゝが分る。十七歳の時、京都より禪僧來て論語を講ず。その地の士風、武を専らにし文學の業を弱として敢て聽く者なきに、先生獨り往て聽受す。論語上篇を終へて僧の歸りし後又師とすべき人のなきを憂へて四書大全を購ひ得て熟讀す。然れども他の誹謗を憚り、晝は終日諸士と應接し、毎夜深更に及び二十枚をみるを業とす。以後も師なくして困學年を経、ひとへに聖學をもつて己が任とす。然にその母氏、老て故郷に一人あるを悲み、毎回暇を乞ふて歸省し、直に之を伴ひて伊豫に歸らんこせしに、はるけき波濤を凌ぎ他國に移るこゝを欲せず。故に致仕して歸らんと乞ひ

且つ二君に仕へ出身の意あるに非ざることを天に誓ひけれども、其才徳を惜みて許されず。廿七歳の冬十月終に逃去る」こ書てある先生の孝心は、母氏の獨り故郷にあるを悲み職を辭して母に奉侍せんと乞ひたる丈でも感心するに、加之許されざるために逃げ歸りしこは驚嘆すべきでないか。私は十四歳で母の膝下を辭してより、母の往生せらるゝまで洋行中を除く外年に幾回か歸省はしたれども、續けて一年二年こ奉侍給仕した事はなかつたのである。今更後悔するも甲斐なきことにて偏へに感ぜらるゝは風樹の歎である。

廿九 師の發病母の往生

明治二十六年には恩師七里和上の發病と、慈母歡喜院の往生は私に取ては、兩臂を打ち落された様なものでした。兩臂を打落された

爲に睡つて居た心の眼を覺まして貰つたことは、雪中斷臂の神光もこれに優つた悟はあるまいと思ふた程である。恩師は病をもつて無常を知らせ、慈母は死をもて無常を知らせ、油斷する勿の兩打撃懈怠に痛鞭を加へて下されたのである。御恩報謝の稱名念佛相續し乍ら眞宗各派の御本山へ歩みを運んだも、痛鞭が一の動機でありました。沿道の順序、滋賀縣近江國野洲郡中里村本部の木邊派本山錦織寺に詣で、宗祖聖人の昔を偲び、二日間滞在したので有た。天神護法錦織之寺とは世人の知る所、私の喋々を要せず御本尊は霞ヶ浦より漁網にて曳上奉りたる坐像の阿彌陀如來、御影堂の祖師は御畫像にて有名の安靜の御影である。傳教大師御作の毘沙門天は境内の一隅に別堂ありて安置せり。左の二詩は當時木邊法主猊下より御自用

の紫地金紋の袈裟を頂戴し歡喜の餘製したるもの。

錦織るてふあなたより

みこゝろ深き紫の

袈裟たまはりて身を照す

これも天神護法なる

木邊名。天下轟。最古道場千歲清。

天神護法錦織之寺。勅額高懸照萬世而明。

木邊を辭して高田に移る。本山專修寺法主の常盤井堯熙輪下に拜

謁の時讀み捧げし二首は

仰く哉高田にのりの穂はみちて

小鳥をすくふ廣きめぐみを

濁りなき高田にうつる月影は

無上寶珠ご尊ごまれけり

輪下は美麗なる短冊に、小泉了諦法師の來りて二首の歌をみせければ予もかく讀みて與ふ

小泉の底も濁らず澄みたるは

みのりの月の宿るなりけり

私は嬉しさの餘り直ちに御料紙の拜受を願ひ、鸚鵡返しにはあらねど御前をも憚らず、

小泉の底の濁りのそのまゝに

みのりの月の宿るうれしさ

と認めて捧げました。その時光壽寺の坊守さん織部雛子といへる

が次の間に居られて、何ぞ一首をと望まるゝ故に讀みました。腰折は斯様であります。

あなたふご光壽二無量たてよこに

織部のひなは法の三月

傍へに居並ぶ人達一人は一字でもご扇子を出し、一人はお釋迦様のお歌をさ乞はれし故に

一字より六字の方がよからんご

南無阿彌陀佛を記し侍りぬ

天竺のお釋迦の歌も源は

南無阿彌陀佛の外になきなり

と記す、所以は釋迦出世の本懐たる、大經に惠以眞實之利と説てあ

れば、六字以外に釋迦如來の謳歌はないものと信ずればなり。

四日市市の濱田屋ごいふは、従前皇族方の御休泊に成た旅館です
が恩師七里和上の徳を慕へる御同行にして、主人の姓名は伊藤傳六
と申し、サクと云ふ姉あり。妻を久子といひ、娘三人の名をフク、
ツル、カメと呼ぶ。長く勤め居る家婢にリキご云ふ老婆あり、是等
家族の名を二首の歌によみ入れて。

傳六ご六字を傳ふ家にサク

信心の花久しかるべし

法の風フク此家はツルカメも

無量壽となる是がお他力

三十 念佛餘韻を記して

何も彼も六字くと口にし筆にする私は全くこれ母が吹きこんで
呉れた息きである。母が撫育して呉れた手であると思はずに居れな
いのである。六字の序でに念佛餘韻を記して念佛相續の助縁にいた
しませう。

彌陀智願海濤平。寫見眞如月影明。

日遠娑婆迷界岸。高歌念佛任舟行。

斯身豈敢纏綺羅。解脫法衣能遠魔。

念佛道場堪踊躍。常觀冥衆護持多。

平等之心與佛同。斯心廣大似虛空。

團欒嘆法非凡土。即是彌陀大會中。

水火二河方叵行。一條白道滅還明。
 決心而進是他力。唯順東西遣喚聲。
 攝取光明到處隨。稱名三昧喜慈悲。
 任他煩惱之多累。宛似蠶繭自縛絲。
 光壽海中光壽樂。無量無得無邊樂。
 二尊聲入稱名聲。增長三緣深厚樂。
 歸意西方鍊石堅。斯中豈敢願人天。
 光明寺勸最明了。教念彌附專復專。
 灰身滅智固非望。只仰彌陀攝取光。
 不管貪瞋癡慢亂。專心念佛往西方。
 幸領一乘真實理。朝昏只仰高恩耳。

此心常住法王家。不願人間之爵位。

雖開八萬四千門。佛意歸開大利言。

請看大經經末說。唯將名號屬慈尊。

卅一 雅號靜所又は柳陰

私の雅號と云へば風流好みの様ですが、小山春山先生に貰つた號を靜所と申したのである。その後、海外漫遊に出掛、彼地此地巡りた中、椰子の樹多き印度に三分の二時日を費したゆへにそれから柳陰と自ら稱したのである。靜所時代九州に遊びたる歸途、船中にて清人の馮雪卿と室を同ふし、詩文の談に耽りて船の進行を忘れたことがあつた。その際私の草稿、三笑堂餘韻を見て卷首に雪卿は左の文字を記して呉れた。

小泉靜所雅君 閣下今日赤間關乘船

邂逅相逢欣幸之至僕茲誦讀

足下三笑堂佳作實有落澗泉聲之妙深

爲感服僕奔波四方二十餘歲北京數

年自愧粗俗庸材徒然之至久遊

貴國十載今黃花節後歸敝國艸々此告

光緒十四年戊子八月十一日

清國浙江雪卿馮雲頓首

この乗合が縁となりて、彼が歸國後も書牘の往復を續けて居たが八九年を経て彼は病没し、只今私の手に遺るは數通の書簡と數葉の詩箋のみ。三笑堂は私の書室の號にて、虎溪の三笑堂に習ふた譯で

もないが、或動機に依て三笑と呼だのが暗に符合したまでのことである。その理由を陳る代りに私自らの三笑堂記文と其他二三の寄送文を擧げませう。

卅二 書室三笑堂に就て

凡志詩書文辭者。好閑靜之地位焉。蓋古今之常情也。余輩少有詩書之癖。慕閑居之意既久矣。客歲夏。弟兄相議。經營一小室。而造作悉皆委工匠。長短巧拙之取捨亦任地。一未自批。工匠造成。某月某日也。兄弟共陞其堂。直配眼於堂四隅。定書架几案位置。工匠曰。世人皆褒貶工匠之巧拙。今將得其評。然無毫降批。嗚呼異人哉。兄弟聞其言。拆手應曰。余輩之居世也。吾忘我。配心於書架几案位置耳。故未敢褒貶工匠之巧拙焉。言畢。

三人大笑。有一客來訪曰。子等何大笑耶。笑花微笑。在迦葉比丘傳法。月下大笑。由藥山和尚發悟。常誦經典。欣然獨笑。蜀譙周也。悟喜憂。以萬事爲夢而笑。北叟也。崔瞻冷笑出於憤。元載怡笑不可測焉。今過堂下聞大笑。必有事故。宜告其來由。余輩使客引手陞堂曰。未能知得迦葉藥山笑。欲同北叟笑亦遠。崔瞻冷笑所不學。今所笑者。笑者知之。而他人不可知之。客曰。其故如何。曰堂旣成。工匠相告。兄弟陞堂。而未問工匠巧拙。言書架几案位置耳。乃及至使工匠有不平之色稱異人焉。與之三人大笑而已。客曰。堂旣成當名三笑堂。古昔。子桑戶。孟之反。子琴張。三人相集。共無言。相見相笑。世人遂稱曰三笑友矣。又慧遠建白蓮社。與十八賢聖。行虎溪。相誓橋外影猶不出。然

偶舊友。陶淵明。陸修靜。訪慧遠。遠公深怡悅。而送明靜。不覺踰橋。三人大笑焉。今以三笑名堂。有所據。不可疑。余輩曰。欲得古人三笑之意。不可得。雖然。若至有其名而無其實。則不如無名也。請君屢來陞此堂與余輩鼎坐助三笑。客曰唯々。兄弟此頷喜笑。客亦笑去笑。

其 二

人身須養生。雖天命固有限量。不養生而耽色不節食。放逸無慚則不能保定壽。中天死必矣。若不能保定壽。則不得對慈親盡孝道焉。是弟兄所常思也。唐柳公度。迄年八十餘。無病堅固。或人問長命堅固如是定有術。公度答曰無別術。但未常以元氣佐喜怒。氣海常溫耳。宜哉言也。雖有喜怒素不實之物也。不如於不

動心氣而養浩然之氣。養心氣者。特在避塵事。避塵事者。無及閑靜。余輩方所以結此堂也。將自今坐此堂而為教間之餘樂全定壽而事慈親。人若問所好惡。可謂惡無風韻好有詩文。名此堂云三笑堂。詩曰。元來不厭喚癡狂。欲學虎溪三笑堂。客與弟兄圍品字。烹茶閑閱養生方。

卅三 雲石柳涯嘯月的文

一日此堂に會す、主客三人石先謂て曰く、凡そ物名あれば必ず實あり、實あれば必ず名なかるべからず。今此堂を自他相呼て三笑堂といふときは苟くも實なきを得ず、その實とは何ぞや、主曰く三笑堂なり。石曰く堂成て日淺ければ名ありて未だ實あらざるべし、知る是より將に三堂の實を索めんごするここを、

而して一の所據なき能はず。客曰く曩に三笑の名を聞て、今其實の所在を思ふに、蓋し彼天王一笑して相將笑ひ、相將笑ふて士庶笑ふの意に據るものか。石曰く納か意の指す所氏ご別なり昔孟之反子桑戸子琴張の三人相目し莫逆に笑を發し、遂に金石の盟遊を為す、即ち之に倣ふべし。主曰く、今三笑ご名くるもの二子と異れり、學んで達することを得ずと雖も、予が遠く慕ふ所は虎溪の三笑にありと。主客その意志を語るに、その據る所の事各別に於て、その慕ふ所の意は轍を同ふす奇なる哉。約せずして其意集る、妙なる哉議ることなくして其轍を一にす、乃ち覺へず三人手を折て笑ふ。石曰く今この意をもて更に堂名を起すべし、主曰く何を以てか題せん、曰く三笑堂是なり、約

九〇
せずして其意集り、議せずして其轍を一にし、覺へず三人齊く
笑ふ其味ひ掬すべし、實に相應せり三笑の名。主曰く請ふこれ
より二子常に來遊し、此名をして虚ならざらしめよ。石曰く諾
客も亦唯々。

雲 石 識

今左に擧ぐる柳涯の文は漢文なれども延書にして寫します。

三笑堂は蓋し名を子桑戸孟之反子琴張莫逆に相笑ふことを取る
乎。夫笑ふに時あり、笑をもつてすべきに笑はざれば則人之を
和を失すと云ふ。笑をもてすべからざるに之を笑へば則人之を
諂ひに近しと云ふ焉。人にして和を失すれば則親み離れ、人に
して諂ひに近ければ則友疎んず矣。昔褒似笑ふて周國衰へ、淳

于髡笑ふて齊國盛んなり、淳于髡の笑は則齊王の謀迂なればな
り、褒似の笑は則諸侯冠なくして來たるなり、子桑戸孟之反等
の笑は則和氣の發するなり。均しく是笑なるも一は以て福を齊
國に爲し、一は以て禍を周國に爲す、一は以て交を朋友に厚ふ
す矣。淳于髡孟之反等の笑は笑を以てすべくして之を笑ふなり
褒似の笑は笑を以てすべからざるに之を笑ふなり、故に天下を
治むるものは淳于髡の笑を見て之を用ひ、褒似の笑を見て之を
退ければ則力を勞せずして天下治まる矣。一家を經理するもの
亦然り、子桑戸孟之反等の笑をみて之を笑へば則父子親み兄弟
和す矣。小泉君堂を三笑と名くる所以のもの、亦父子の親み兄
弟の和を欲してなり堂成り茲に一言を呈す。

次は嘯月といへる俳句の宗匠の説なり

奥に庠堂あり三笑堂と呼ばる、予一日此堂に跪きて主人公に問ふ、堂に名くるに何の故ありやと、主公黙して答へず。傍に一老人ありて呵々ご打笑ふ、既にして窓外をみれば檻下に青松あり古梅ありて、後ろには縁竹猗々たり。聊か其意を解して手を打て笑ふに主公も亦微笑す、さあれご今に事物の姿をのみ推して主人の情態を察せず。つら／＼おもんみれば、心隨萬境轉ごは偶ま遊べる客位をいふなり。維摩に所謂隨其心淨則佛土淨とは、心源より流れ出て依正の果報を得ることを云ふなり。そもさん生平酒飯茶に耽らず、琴詩碁に樂むの謂ひか、又虚誑の三

業を執せず彼願力の三輪に乗ずるの謂ひか、此は是羊鹿牛の三車を決して大白牛車を定むるなり。唐の古へには月のために庵を出て橋を越へて笑ひし虎溪の白蓮社あり、今また何をか云はん、學のために堂に籠り机に凭て之を披き天地人の三才に知識を磨き、寢食を忘れて樂まる、より三笑をもて堂に名附らる、の主意ならむかご、拙き筆を取て愚言を述ること爾り

机こそよけれひる寢の枕にも
嘯月艸

卅四 伊勢國は縁深き所

私の雅號靜所及柳陰と呼ぶ所以を語る事に就て、馮雪卿に邂逅せし船中對話に渡り三笑堂詩艸に馮雪卿が題したる序文を擧げ、圖らず横道へ走り込みましたから元の道へ戻りて舊話を繼ぐことに致し

ませう。伊勢は私の祖父叔父叔母ありし血縁深き國である。寺は三重郡大矢知村川北法從寺なり。祖父は私の幼年時代に往生しましたので顔見合せたことなし。叔父存瀏師は私の海外にある間に他界の人となりて仕舞ふた。從弟の加藤該英子は豫て博多の龍華教校に道學二修を數年間、七里恒順師に師事したので私に取ては、親戚と學友とを兼た間柄で有たが今は空くなりし。叔母は長島蓮光寺の坊守と成て、私が伊勢へ參る頃は故人でした。こんな血縁深き上に法縁厚き所、初回より年を重ねて三四年續けて往復し、或は隔年又は二年置きに參りましたので、親しき法の友達が多くありました。

乃祖父存惠法師の小照に題した詩一首
嗚呼此是父之父。
眞個眞然如遇父。

凝眼怪非吾父乎。父乎非父父之父。

加藤該英子に留別の詩と蓮生寺に蓮を觀て綴りたる二十八文字は

二句餘日勢州遊。朝吸烟霞夕法流。

終始所憑君在耳。對恩唯是一詩酬。

朝來獨坐汲清茶。最覺詩情畫意加。

此寺蓮生名實好。請看紅白有蓮華。

關の地藏さん一休禪師が犢鼻禪を手首に卷て是を開眼すみしと、

大衆を驚かせたと云ふ傳説に名高き町の進徳義會に議演の時、私の

禁酒禁烟説に同意した幹事の木崎素明氏が講だ歌。

酒烟草好みし口を念佛にかへしは君の恵みなりけり

九六
次の間にある人達の語り合ふ聲の内に皆の好く酒烟草を吞まずに
皆の好かぬ念佛ばかり稱へて居らるゝと云ふ一語が私のことらしく
耳に入た。その折に揮毫を依頼せられ居たので有た。墨は磨れまし
たから願ひますと隔ての襖を開て、額字や軸字やの地紙絹本と扇子
短冊等を運ばれた故前に耳に響いた念佛ばかりを思ひ出し。

念佛は好みもせねど酒烟草

嫌ひな口にひまがある故

同町に福藏寺と云ふ眞盛派の寺あり。住職は盆梅愛翫家にて梅寺
の通稱あり、案内せられて行けば生憎留守なりし故、

薰る名を聞て問へども梅寺の

花も過ぎたり鶯も留守

坊守教會の席上、坊守さんの姓名を聞けば花實サカエ、藤崎イク
望月ヌヒ、蓮井ナヲ、松山エイ、松枝コウ、伊藤シゲ、岩間イエ、
木崎イキ、等なり。

信心の花實さかへて行く人の

住居の寺を延命といふ

下る程めでたき花の藤崎に

のりを仰ぎていく千代や經ん

煩惱の雲の中にも圓かなる

法の望月ぬひ出にけり

信心の花の蓮井に咲きしより

なを相續の色まさりけり

千代経ても色の替らぬ松山に

信心の根も堅くすむいる

松枝に煩惱の雪つもるこも

五こうの湯氣に消し給ふなり

伊藤なよをしやくやは繁くこも

おやにまかせて名を稱ふ身は

煩惱の岩間にも咲く法の花

八重九重の色榮へつゝ

法の花咲く木崎にすむ身こそ

いきの緒長きためしなりけり

法の水清き中湖信濃なる

すわよりも名や高くなるらむ
楠村五味塚立法寺岡眞浄氏に逢ひ喜びを共にしつゝ法悦をよみた
るものを思ひ出すは無常の一事、眞浄氏も始め親みたる友の多分は
今世になき人となられたことである。

こゝはこれ元來廢機立法寺

虚假はなれたる主の眞淨

名も薫る楠村岡に来てみれば

わかのりの花盛りなりけり

六の字を口にし乍ら渡る身は

五味塚ならで百味塚なり

法の水そゝく岡路に生立し

竹野葉風の音は念佛

次古江宣教氏見寄韻

素是行雲流水身。

何關浮世屈兼伸。

朝談紫閣朱門士。

夕語茅堂草屋人。

古梵經中遙問古。

新洋書裏近知新。

嗚呼四海皆兄弟。

佛意無曾隔怨親。

桑名では帆山純孝、岡村清兵衛、中村豊次郎、水間成藏、平岡道也、森喜平の諸氏、三日市に眞岡慶雄、同觀海、清水眞乗の諸氏、楠村に古江宣教、同宣正、岡眞淨、同道光の諸氏、西日野に眞弓觀光、玉野玄明の諸氏、神戸に高神覺昇、佐々木清心、坂倉半兵衛の諸氏、天名村に河瀬良琛、越川に加藤玉巖、河曲村に花滿眞聲の諸

氏、四日市市に丹羽教開、東忍教、黒川新三郎、濱田傳六の諸氏、大矢知村に加藤該英、蒔田楚雲の諸氏、その他一面識の人には僧侶にも多いが法縁の友は夥多ある。二回目に津市にて山川眞源氏の寺に法話の時、大瓢に題を乞はれて。

筆とれど何分腹がからふくべ

只うかくご恥をかき僧侶

こんなこと書た様に思ふ。

三十五 法嗣に捧る詩一篇

三回目に伊勢を巡演の時は長く獨逸に御留學の高田派本山專修寺法嗣輪下、現今の管長様が歸朝せられし際ゆへ、希望の文と詩とを捧げ奉りた。その長篇は左の拙作である。

高田山今高田山。巍然秀出諸山間。
 鶴聲聞天天可仰。山松高處不易攀。
 門閥之家出博士。虎翼之勢可知耳。
 吾門有失師父觀。須爲師父育赤子。
 今日法將知是誰。十日十指推高師。
 高師進退重且大。大仕重職關盛衰。
 吾法氣運屬末世。于僧于俗太衰替。
 內地雜居不足憂。唯憂僧俗安眠弊。
 萬口一唱高師崇。學德由來冠日東。
 冠日東今善知識。豈不繼承宗祖風。
 南海東山又北陸。人迎高師忘谷酷。

歡喜滿胸或吞聲。合掌又手付默々。
 嗚呼我亦合掌又手倫。嚴護法城々中臣。
 高師若非法城主。十年功業化一塵。
 仰望師之功業高天下。破邪顯正日々新。
 只恐不遜其罪大。請恕現當救世仁。
 法主輪下に謁して嬉しさの餘り
 うれしからずや露の身の
 こぼれずまたも高田なる
 たふごき月のてるもとに
 ひかりをうくる墨の袈裟

三十六 眞宗問答二十一箇

是は某學士の求道に志して訪ね來りし時

眞宗の眞の信者になるのには

いかなる道をふむがよからむ

何故に眞宗と名を擇びつゝ

信ずる道を求めんごする

かくゆへと云事なしに眞宗を

信じてみたき心起れり

その様な玩具になさる宗教を

我眞宗に求むるは駄目

駄目なりと叱咤されても一言の

申し上様なくも聞きたひ

聞度とおもふ心になられしは

如來の慈悲の他力なるらむ

お指圖の他力ご申す事柄が

一寸不審に思はるゝなり

不審なく如來の他力きけたなら

眞宗信者その外になし

人として他力によるは意氣地なし

自力にすゝむ使命ならずや

小事には暢氣なる身も大事には

他力によるが人の當然

その譯をたやすく教へ給ふべし

聞いて心におさめたきもの
健康の人も病氣にかゝりなば

醫藥をたのむ他力ならずや
病人の醫藥によるが他力とは

譬喩のお諭し其上を請ふ
人生の問題中に大なるは

死の問題と氣付たまへよ
人として死の問題に氣付なば

解決出來ず何としませう
學者でも智者でも尊貴富豪でも

如來の他力信すべきのみ

死に申す大問題を手短かに

受け得る様に導きたまへ

人として根本的の要求は

長く生き度ことにあるべし

長命を望むは人の根元の

自性乍らも死に至るなり

望みつゝ生きられもせず死に至る

それは生存する丈の人

生存の外に人間生活の

あることならば早く聞き度

生存は喰て死ぬる名生活は

末の目的立てる生き方

大事なる死の問題に解決の

つぐのを人の生活ごすか

肉體は死すとも死せず佛光の

中ご安心しての生活

肉體は死しても死せぬ物ありや

委く説てきかせたまはれ

信仰のなき身はそんなたわごを

云ふが常故眞宗をきけ

人生における最大幸福は

死せぬ心魂あるを知るのか

かく申す死の問題の解決が

信仰なりと承知せられよ

肉體はいついづこにて僵るとも

光明中と安堵するの

死は死としそのまゝ生る心魂ご

知るが光りの中の証據ぞ

肉體の死すると共に新たなる

如來の國に生き代るのか

その通り信じて浮世渡る身の

こゝろの内は今も極樂

信仰はなくとも理想遂る身は

此世極樂なるにあらずや
人生は理想通りにならぬもの

ならねば苦辛多き世の中

信仰のある身は浮世思ふ儘

ならずも苦辛なしにゆけるや

繰返し申すが如く光明に

守護せられつゝ安樂に過ぐ

光明に守護せらるゝと云ふしるし

知る近道を教へたまはれ

救はるゝ御恩を知て世の事に

不平不満を云ふ世話がない

人ごして不平不満の多き程

つらきはなしと今知られたり

みほごけの教へを信じ現に今

正定不退満足の身ぞ

満足の身ご成り得るは光明の

懐ろなりと信ぜられけり

光明の懐ろに居て肉體の

終りは浄土眞宗の人

三十七 往生人の解釋其他

有名なる二河譬の對告者往生人ごあるはいかなる人を指したのか

往生とは此世を去て彼世へ生れるご云ふことのみであるか、判然と

して居らぬのではなからふか。否判然し過た爲めに眞の解釋の誤られたま、考へ様ともせずに通過して死人扱ひに成て仕舞たのであるまいか。

この往生といふ二字は、往て生れると云ふばかりではない。往きつゝ生きるに云ふことが最も重要な意味をもつものにして、往くことが即ち是生うることで有て、今一つ云ひ換れば生るゝ者とは自由を得る人のことゆへ、死ぬ者とは囚はれて居る人のこと、自由を得ないことである。今の世の中を通觀いたしますと死人の多きこと驚くべきではありませんか。名譽に囚はれ、地位に囚はれ、財産に囚はれ、愛欲に囚はれ、道徳に囚はれ、宗教に囚はれ、教育に囚はれ、主義に囚はれ、政治に囚はれ、その他自己以外の物に囚はれて

居るもの夥多なり。みなこれ死人と申さねばならぬ。

生死の生は往くことで有て死は止まることであります。生は萬人の欲する所にして、死は萬人の厭ふ所なりとは萬人の拒否しない確乎不扨の論理であります。併生には永遠の生あるも、死には永遠の死はないでせう。死は睡眠に同く期間を経れば必ず覺るのである。覺めて停止するものは半死半生と云ふべし。眞に生きて居るものは必ず前進するのである。

往くことのみが目的ではない。生きることが本願である。而して往くことが即ち是生きるものであるから何處までも往くことを繼續して永劫終局はないのである。安樂國に往生して其所に止まるのならば、それは眞の往生ではない。往相には還相が離れては居らぬので

ある。若し往生して其所に止まらば、往生にあらずして往生なりと云はねばならぬ。眞實の往生、すなはち往くことを以て生きる事とする精進者の前途は無上菩提である。それに無上菩提の眞意も知らずして、味はふこともなくして、他人に往死法を宣傳するは外儀の佛法者であるまひか。之を内心外道の人と申してよからふ。

眞の往生人、すなはち往きつゝ生きる眞人の生活は破獄の生活である。依て今日の一日も破獄の行爲より外に眞人の生活はないと申しても宜しい程不斷に精進するのである。名譽の獄より、地位の獄より、因襲の獄より、迷妄の獄より、妄執の獄より、その他種々な外物をもて構成されたるは八萬四千の獄より脱出することの外に眞人の生活はない。故に解脱とは眞の往生人の往生相即生相と云ふ

べきである。生は覺なり、死は睡なり、生は前進なり、死は停止なり、生は自由なり、死は繫縛なり、自由は極樂なり、繫縛は地獄なり、生きて前進して繫縛より解脱せんとするものを指して往生人といはれたのであると解釋する、敢て無理ではなからふ。

卅八 生死無常とその他

生死は眞の無常にして生きつゞけることの至難なる如くに、無限に死に止まることも亦不可能である。生あるものは必ず死し、死するものは亦必ず更生するのである。諸行無常是生滅法を無限に繰返すのみにて、生滅々已寂滅爲樂し了るものは塵點久遠の昔より未だ曾て一人もなく、今後亦盡未來際の末の末までないのである。

生は自由なれども苦惱である。死は不自由なれども安逸である。人は安逸の死を欲して、苦惱の生より逃避せんとする久遠劫來の習癖が離れないのである。地位を誇り資産を恃み名譽を貪り主義を張る等、自己の持物に意を留め其持物の上に腰を据へ安逸の死を欲するが一の病癖と申すべきである。けれども酒醉者本性違はずとか申して、いつか覺めて生の道に歩を向けることになるが、歩を向け乍ら精進するもの極めて稀少である。所謂半死半生の懈慢者ばかり多い様に思ふ。

乃て豫想なく、期待なき妙智主義なく、定見なき眞理昨是今非か生活者の進展相、夫故にいかなる悟りだと云ふ人でも明日は迷ふことないとは云へないのである。迷は生であり悟は死である、生は醒

なり死は醉なり、迷は苦なり悟は樂なり、醒は繁なり醉は閑なり。人は皮相に苦と繁とを厭ひ乍ら、中心に之を求めて止まない。表面に樂と醉を好み乍ら、中心には之を逃避せんとします。是が久遠却來の傳習にして脱すること能はざる所に、生死無常の動かぬ理を知らねばならぬ。

二河白道の圖をみても白道を踏む旅人の装束十の八九まで死人に被せる白装束、生きた旅人の姿でない。ですから我々もこんな所を未來には行かねばならぬのかと語り合つ、澁面で二河譬の圖をみて居るのが多いのである。そんなことですから聞法の人に生きたる信者なくして、しみたれもの、多くなる筈です。生きた御教訓を殺して聞くのですもの。既往はごもかく今より改めて生きた御教訓を手

入れせずお用ひして生きた信者となりませう。火の河と云ふも、水の河と云ふも、群賊悪獸と云ふも遠き末にみるのではない。現在の今日一日の日暮し朝起きるから夕に寝るまで、惜い欲い憎い妬ましい是が水火の二河である。見るに付聞くに付思ふに付、一として煩惱の外はないでせう是が群賊悪獸であります。

佛法に縁のなき身は是非なけれども、苟くも御縁ありて法を聞く身に成たら、二尊の遣喚に順ひ脇目をせずし精進しませう。群賊悪獸に囚はれず、來たれと喚ばふ聲を便りに足許みず、向ふのは西の岸へ往きつゝ、生きるの外はないのである。

卅九 今が淨土行の道中

私の母は常に今日の一日もお淨土參りの道中なりと、お念佛申す

口のひま／＼に出づる語でありましたが、存生中を思ひ出すご耳にその聲が響く様に感ぜられます。その道中と云ふが矢張群賊悪獸に追はれ、浪と炎の中を西岸に向ふて行く旅人たる私であることを忘れてならぬ。母は三十五歳で未亡人と成てから、嚴父の役をも兼たる慈母、思ひ出す度毎袂を濕ほさずに居れませぬ。父は文久二年七月廿五日四十二歳にて往生しました。當時私は子供心に父を老人と思ふて居ましたが今思へば自分の半分年でありました。臨終に私の手を握り一人前の僧侶になれよと申されたのが私に取ては父の言葉の聞き收めであるが、敢て骨髓に浸染めねばならぬ要語とも知らなかつた。けれごも傍に居た母が、今仰しやつた事を忘れなざるなよと一語添へられたのを記憶して居たから成長に随つて父に申譯のな

いことを深く感じたことである。

母の高底によりて私も今が浄土行の道中と心得て細々乍ら御恩報謝の稱名相續しつゝ、老衰に付病氣に付、今が浄土行の道中なりと母の云はれた言葉を念頭に浮べます。六窓に騒ぎ回る猿もいつこなく静まり稱名念佛にいそしむのも母の御恩と思ひます。道中ご云ふ言葉は出發の日より目的地に安着する迄の道すがらと云ふ事なり。一念發起平生業成の宗旨に於ては今一定の間と仰しやつたのは浄土行道中の初步にして、佛恩報盡の稱名は行住坐臥に忘れざるごの間斷なしと仰せられたは、浄土へ着する迄の足並である。總て道中は長き日數にせよ短き日數にせよ、思ふまゝに行くものではない。天候でも晴あり雨あり、時候にも暑あり寒あり、宿泊する所にも意に

叶ふあり逆ふあり、種々區々なれども一夜く移轉すること故に堪忍し安し。

人間一生の日送りには窮達あり、浮沈ありて一様ならねども、昨日は過去で戻らぬ日なり、明日は來らぬ日にて分らぬもの、今日一日ご思へば堪へ安し。それが佛願を信じて念佛する身の上は一人道中でない、南無阿彌陀佛をとなふれば、十方無量の諸佛は、百重千重圍繞して、よろこびまもりたまふなり。有難きことでありませんか、嬉しいことではありませんか、有難き心も續かず、嬉しい心もつかねど、守りて下さる方に御油斷はないと頂けば一層有難くある

四十 母の肖像を拜して

思ふまゝなる詩歌を製して書き添へた母の肖像を常に掲げて置け

ば、御同朋の一人が歌はよめますれども詩は讀み兼ます、願くば延書にして下されとの望みに任せ、

一三三

慈母の恩や慈母の恩

海の如く山の如し廣大の恩

幼にして父を喪ひ獨り母を怙む

母は父の嚴に代りて恩に恩を襲ぬ

嚴に過ぎず又愛に過ぎず

最も深し家庭教育の恩

二男一女は一の母に依り

三十年餘洪恩を受く

書を讀み字を習ふ母の膝下

紙を展べて先筆墨の恩を知る

晨に昏に教示切なり

衣食住皆四恩にありと

東西學庠師友を訪ね

道を聞き理を解す亦母の恩

香油を用ひず美を飾らず

學資畢竟血涙の恩

血涙の恩海は兄弟を浮べ

釋迦佛陀の恩を知らしむ

印度洋豈廣しご云べけんや

殆ど邊際なき慈母の恩

一三三

今茲明治癸巳の夏

慈母往く矣深恩を奈何せん

風樹の歎既に逼迫せり

嗚呼母の恩を報ずるに由なし

端坐香を焚て肖像を拜し

唯佛名を稱へて恩を報ぜんと欲す

恩や山の如く又海の如し

慈母の恩や慈母の恩

これもまたゆめなるべしごおもひつゝ

さめぬまよひのみのつらさかな

くもふかきそらにたくへんむねのうち

いよくはれぬさみだれのこゝろ

四十一 父は釋迦母は彌陀

釋迦彌陀は慈悲の父母は宗祖聖人の和讃、ゆけご勸むる發遣は父の釋迦如來さま、來れと呼べる招喚は母の彌陀如來さま、此兩親のあるを知らず長く迷ふたのである。今生一世の片親を失ふてさへ侮られて悲きことを知た私、永き後生に二親なしでしたら何うしませう。永不成佛と擯斥を受け必墮無間ご侮辱を蒙らねばならぬのに、種々に善巧方便し我等に無上の信心を起させたまひ、輕侮を蒙らぬばかりか十方諸佛の讚嘆をうけ、釋迦佛陀よりは親き友よと握手せらるゝと云ふ大幸福は筆舌に盡されることでありませぬ。

釋迦彌陀の慈悲よりぞ

願作佛心はわしめたる

信心の智恵にいりてこそ

佛恩報ずる身とはなれ

彌陀大悲の誓願を

ふかく信ぜん人はみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿彌陀佛をとなふべし

四十二 世は遷流を義とす

世は遷流を義とすとは昔から云ひ傳へて居ますが實に動かぬ語である。まあ世の中を御覽なされ、片時も一所に停滞しませぬことは今日一日の時間から云ひましても、夜が明た、寢所から起て出た、

面を洗ふた、佛前にお禮した、陛下の御肖像を拜した、飯を喰ふ、仕事に挂る。晝に成た、中食を喫する、汽車旅行する、着車する、旅館に入る、夕飯を取る、浴湯に入る、移り／＼て進む時間一分より十分に、十分より二十分に、二十分より三十分に、三十分より一時に、一時より二時に、二時より三時と遂に十二時に至れば更に轉回して毎日毎夜一所に停滞せぬ、是が無常の世であるここを雄辯に語つて居ませう。

春はいつまでも春でない。知らぬまに夏に移り、暑さを語る聲の了らぬ内に冷しく成たねーと袷を身に纏ふ秋に移り、身體に適當な時候と賞した秋は何所へ去たか、綿入の襲ね着しても寒さに堪へないさ唧つ冬に行當る。是が無常の世云はねばならぬ證左である。

咲た花の散るも常なき世を見せ、盈ちた月も缺けて常なき世を知らせ、一人で有た娘は分娩して子を抱く。は無常の姿なり、嫁は姑に變りゆく無常の相である。健康の人の急死を無常とみるは勿論、重病で醫が手をはなした人の恢復したも無常である。斯く數へ來らば世に無常ならぬものは一もありはしない。如何にも世は遷流を義とするに相違ない。

その無常が一々因果に關係せぬものはないのですから。茫然としでは居られませぬ。同じ仕事をしても一時間早く係つた者と、一時間遅く係つた者と同じ仕事の出来る筈はない。時間の因に差がある丈、仕事の果に別のあることは明かでありませう。春夏秋冬移り行くに隨て、寒熱冷暖の差別あることを心得て、寒の來らぬ前に防寒

の準備を爲し、暑に移らぬ前に避暑の準備をして置ねば當惑する事必定である。その位の事は誰でも知て居ると云ふけれども、知り乍ら云ひ乍ら實行する人が稀なる様である。

人として世に生れ出たものに、貴賤貧富の何れを好むと問は、富貴を好み貧賤を嫌ふと答ふるに躊躇せぬけれども、好きな富貴に縁が遠くして嫌ひな貧賤に縁が近ひは何故でせう。みな是因果縁の爲す所なれば他を恨むことは出来ない。無病長生を願はぬものはないのに病人と短命は比較的世に多いのである。下民の我々に於て我思ふまゝにならぬのみならず、一天萬乘の天皇陛下でも御不例あり崩御あり是が萬古不易の因果の道理である。

四十三 因果の明鏡をみよ

因果の鏡といふことは

蔭と日向のなき様に

物事律義に控ひ目に

たゞ正直に如くはなし

然れば強いて祈らずも

神佛まもりたまふらむ

神や如来にまもられて

無病長命安穩に

子孫繁昌福德の

種まく様にこゝろせよ

因果の道理を信ずれば

我身の上も人の身も

鏡にうつしみる様に

過去も未来もみゆるぞや

この世で金錢もつ人は

前世の種のよかりしぞ

前世に善き種蒔かざれば

この世は貧苦にせまるなり

この世で慈悲をせぬ人は

未来貧苦にせまるなり

三世はたごへば目の前よ

速い遅いはあるとても

善悪因果は動きなく

毛筋も違はず報ふなり

利巧で富貴になるならば

鈍なる人はみな貧か

鈍なる人にも富貴あり

利巧な人でも貧をする

貧乏で子供の多きあり

富貴で子供のなきもある

何れも前世の種次第

權威づくにはなりがたし

富貴に大小あることは

なさけに大小あるゆへぞ

また貧賤の大小も

非道に大小あるに由る

善悪二つにまくたねは

貧福二つに生へ分る

凡そ因果の理を知るに

小因大果といふことを

よく／＼心に會得せよ

たごへば一粒まく種に

花の開けるのみならず

多くの實をば結ぶなり

少しの罪をおそれねば

むくふ苦患にかぎりなし

作す善根は少くも

多くの功德うるものよ

少善とてすてず積み

悪は根を絶ち葉を枯らし

善の芽生へに培ふて

榮へんことを願ふべし

かゝる由れをわきまへず

大罪ばかり科と知り

小罪こゝろにゆるすこと

いごもあやうき事にこそ

水のしたゝり少くも

流れて大河になる如く

小罪とてもおそれねば

つひに地獄の業なる

少しの善も積みなば

無量の善果うることを

水にたくへて知るならば

日にく油断なく進め

四十四 善悪取捨に心せよ

人となる身を思ひなば

慈悲善根の種を蒔け

やるも貫ふも因縁ぞ

互ひに救ひ救はれつ

貴賤貧富のありさまは

みなこれ浮世の習ひなり

今貧賤の身となるは

昔施しせぬゆへぞ

富貴も永くつゝかねば

盛んにくらす其内に

慈悲善根を作し置けよ

貧に成ても名は残る

金銀田畑山林を

いかに蓄へ置くととも

衰へぬれば人の物

欲には限りなきものぞ

有れば有る程足らぬもの

事足ることを知れよとの

ほごけの教への違ひなし

これを信じて行へよ

非道にためた金銭は

人の恨みのかゝるもの

末は子孫の仇となる

よく省みて慎めよ

枰や秤や算盤や

筆の先にて無理するな

神や如來が見て御座る

愧よ恐れよつゝしめよ

美目はよくとも富貴でも

嘘ほご人の瑕はなし

高き卑しきをしなへて

人は美目よりたゞ心

正直にして柔和なる

人の心はうつくしく

鏡となりて末までも

光る姿をのこすべし

官民位置はことなるも

その分限をつとむるが

國家に向ふ忠義にて

祖先や親に孝となる

いかなる大福長者でも

時節來れば是非もなし

金銀財寶妻子まで

すて、冥途の旅に立つ

このとき一生造りたる

罪と咎とに引づられ

いかに後悔するごても

更に返らぬことぞかし

後生はその身の稼なり

他よりちからは添へられぬ

たれも命のあるうちに

大事な後生忘るなよ

人のいのちの脆きこと

草葉の露によく似たり

今宵頭痛かし初めて

直に死病となるもあり

今朝は機嫌のよき人が

暮に頓死をするもあり

今日は他人を送りしに

明日は我身を弔はる

妻子財寶わが身まで

みなこれ無常の物なれば

一つものころものはなし

よくよく心に合點せよ

無常くとみな人が

口にかしこく云ひ乍ら

こゝろに染ぬ情けなさ

事にあたりて驚きぬ
可愛妻子におくれたり

いとし夫にわかれては

世になきことのある様に

共に消へたき心地せり

やる方もなき悲さに

尼法師にもなるべしご

おもふも月日過ぬれば

忘れて元の黙阿みぞ

はやく御法を聴聞し

未來安堵の人となれ

横病横死の難もなく

生涯無事に送らるゝ

定期のいのち全ふし

そしてこの身の終りには

彌陀の本願あやまたず

安養界に生れしむ

六神通をさとり得て

生々世々の父母や

孫や子供や親戚を

自由自在に濟度せん

この世は堪忍世界とて

とかく心のまゝならぬ

ことさら老少不定にて

あすの請合出来ぬなり

永き未來の浮き沈み

知識もとめて用意せよ

用意のなきは不安心

早く安堵をするが勝ち

四季の衣服や三度喰ふ

食の用意は知り乍ら

一大事なる臨終の

用意忘るゝ愚かさよ

來世といへば皆人が

程ある様におもへごも

吐く息き一つ返らねば

その場が直ぐに臨終ぞ

四十五 一日一日を平穩に

因果の道理を知て今日も無常の中の一日なることを忘れずに渡れば
恐ろしき貪欲に身を亡ぼさるゝこともなく、恐ろしき瞋恚に身を
焼かるゝこともなく、一生涯を無事平穩に送りて自分一己にさゝま
らず、その徳四隣に及んで淨土に往生成佛の後還相回向するまで待
たずして、淨土行の道中に多大の利益を施すことになる。若し因果
の道理を辨へず、今日も無常の中なることを知らずに世を渡るとき

は、世間に所謂我利／＼亡者ご成て貪欲の穴から出るこそ叶はず、思ふ儘ならぬ世を知らずに瞋恚の炎を吹き出し、三悪道を現出するの不幸ごなる。

資本家對労働者の面白からぬ修羅道を現出するの、畢竟双方が因果の道理を辨へず、今日も無常の中の一なりと云ふ觀念のないのが原因と成て居るのである。無信仰にて無明位中の仕事は貪欲の波も、瞋恚の炎も知らずにする仕事ですから怪俄の出来る筈である。その知らぬと申す所以は貪欲の波に溺れて居るここです。瞋恚の炎に焼かれて居ることです。溺れつゝ焼かれつゝ、相互に組合つき合して居るのですもの、三悪道を造る勸進元現在の慘劇恐ろし事でありませんか。

恐るべき穴を知らぬのは未だ夜の明けざる時のこと、一たび太陽の光りに照されたら穴の恐れを去らずには居れまい。眼前に三悪道を現出する無明の闇も、智慧の光明に照されぬれば恐るべきは貪欲瞋恚であるご云ふことに目がさめます。目は覺めても貪瞋の穴はなくならぬけれども夜の明たので有る穴に落込ぬ如く、貪欲の波に溺れず瞋恚の炎に焼かれず慚愧懺悔するは光明照破の御恩であります。

無明の闇を破するゆへ
智慧光佛となづけたり
一切諸佛三乗衆
ごもに嘆譽したまへり

光明くわうみやうてらしてたへざれば

不斷ふだん光佛くわうぶつとなづけたり

聞光もんくわう力のゆへなれば

心不斷しんふだんにて往生わうじやうす

南無阿彌陀佛なむあみだぶつの名號みやうごうは、破闇滿願はあんまんぐわんの徳とくがある故ゆへ、遇法ぐほふの人ひとに於おて
自力じりきの機功きかうをさしはさまず信しんじ稱さなふる身みになれば、破闇滿願はあんまんぐわんの徳とくを
全領ぜんりやうすることが出来るに依よつて愚者ぐしゃ乍しばら賢者けんじやの知しること能あたはぬ愉快ゆくわいを
胸むねに蓄たくはへて、一生しやうが涯がいを平穩へいおんに送おくられます。家屋かおくは火ひの爲ために灰燼かいじんご成なる
ても、あゝ無常むじやうの世よに違ちがひないと合點がてんして歎なげきに沈しづまない。又また田畑でんはた
は水みづに流ながれ失しつても、無常むじやうの實況じつきやうと承知しやうちして悲かなみに陷おちらず、傳染病でんせんびやうの
爲ために避病院ひびやういんに入いるとも拒たまず。平生へいぜい注ちゆ意いを怠おこらず火ひの用よう心じんをして居か

ます。衛生法ゑいせいほふを守まもつて居かます。然しかうしての上うへの出來事できごとなれば恨うらみな
き心こころであるは他たにあらず因果いんぐわい因緣いんねんを諦あきらめ居かるに由よるのである。
今日こんにちも無常むじやうの中なかなる一日いちじつご云いふこころを信しんじて居かるに由よるのである。
斯かく心こころが廣ひろく成なつて苦患くくわんを感かんずること薄うすき故ゆゑに、水みづ火かの患かんにあふて
も病氣びやうき起おこす様やうな心配しんぱいはない。病院びやういんに入いつても心こころ廣ひろく、悠然ゆうぜん治療ちりやうを受うく
から早はやく全治ぜんぢし退院たいいんすることが出来るのである。假令たせ治療ちりやうの甲斐かひな
くして僵たはるゝごも、破闇滿願はあんまんぐわんの徳とくを全領ぜんりやうした仕合しあはせには更さらに恨うらみなき
心こころより樂たのしき位置かちに轉生てんじやうするのである。無明淵源むみやうえんげんの病やまいぬけしたる徳とく
は格別かくべつなもので此この恐おそろしき無明むみやうを破やぶりて、志願しげんを満足まんじくさせて頂いたくま
での如來にょらいの御苦勞ごくろうはいかゞでありましたらふ。蓮如上人れんにょしやうにんはこの光明くわうみやう
の緣縁にあひたてまつらずば、無始むしよりこのかたの無明業障むみやうごふしやうのおそろ

しき病のなをるといふことあるべからずと、仰せられてあります。實に報じても報すべきは大悲の佛恩である。今は光明の縁に催ほされて佛願の不思議を信じ、無明の闇に方角を失ふた身が何の方角にも迷はず、無常の今日を一日く平穩に経過すると云ふ仕合、喜ぶべきことである。

四十六 人の猿眞似なきや

猿は人眞似をしたがる獸にて、山村などには留守宅の搖籃に睡る幼児に入湯させる積りでしたことでせうが、盥に熱湯を盛りその中へ幼児を入たので可愛想に爛死して仕舞ふた。野畑から歸てみれば此始末、悔むに甲斐なしで有た。學者の説に人間は猿の進化したものと云ふを聞けば、猿の人眞似は進化の行爲とみられぬ事もないが

現代は人の猿眞似が多い様である。是は退化の行爲といはねばならぬ、困つたものご云ふべきである。近頃六猿の圖を提げ來りて題を求るものあり披見するにみざる、きかざる、いはざる、みるざる、きくざる、いふざるの六猿にして、兩眼を兩手をもつて隠したるのがみざるなり。左右の耳を兩手をもて蔽ふたる猿がきかざるなり。口を手にて塞ぐ猿がいはざるなり。眼も耳も口も閉塞しない所の三猿を名けてみるざるきくざるいふざると云ふのである。古人の歌に「見ず聴かず云はざる三の猿よりも思はざるこそまさるなりけれ」ご云ふがあるに習ふて私は斯くよみました。

とにかく己が身分を守りつゝ

上をみざるにまさるものなし

あしき事きかざる工夫するよりも

我手はなして善きことをきけ

よきことを口にせぬのがましらとは

開けゆく世に誰れも云はさる

さる昨日來らぬ明日を先づのけて

今日のみ直ぐの道をみるべし

願はねど今日もさる日となりけり

鐘の音をきく入相の空

三筋毛の足らぬこそいふさる物に

毛のみまさりて劣るなよ人

世は開けたと云ふが開け過ると摧ける松茸に類してはならぬと思

ふことです。形の上では酒に酔ふて猿の様に赤く成たと申しても猿
ではない。立派な人間である。只油断のならぬは心の猿の狂ひであ
る。之を制するには教への綱を以て縛ることです。その綱は二諦相
依云ふ今生後生二世かけて怪俄せぬ様に縛りて下さる丈夫の綱で
ある。その徳を心易く述べて見様と思ひます。

騒ぎ度心の猿の落付くは

教への綱の力にぞよる

みおしへの綱の力のなかりせば

心の猿は狂ふのみなり

御教への綱なかりせばいかにせん

心の猿のくるひ回るを

狂ふとも心の猿の力にて

切り能はぬは御教への綱

逃げ回る心の猿を追詰て

縛りたまはる御教への綱

徳號の慈父光明の慈母ありて

心の猿を抱きとめけり

いだから、心の猿は御佛の

慈悲と智恵とに化せらる、哉

化せられた心の猿は正定聚

のぼる位は不退轉なり

樹に登る猿は落ても不退位に

登る心の猿はおちざる

なんと云ふ幸福者にてあるまいか

啼く聲も早南無阿彌陀佛

四十七 何事にも加減せよ

何事にも加減せよとはちと珍題の様ですが、今の世には加減せずになして失敗するものが多くある様に思はれてならぬからこんな題を掲げてお話ししたす心得である。古來塩加減をみよと申しますが尤もなここである。實に加減次第で同じ品に美味と不味との差別が出るは相違ないことです。

西洋學、生まかぢりの先生に加減知らずが最も多いことである。醫學研究の爲に獨逸に留學したドクトル大威張にて西洋風を吹き立

赤ん坊には牛乳に限るなんて云ひ出し、結構な母乳あるのに吞ませず、牛乳育てにした如き加減知らずの仕事である。成程人の乳と牛の乳との分拆したら栄養量が牛乳に多くあるかも知れぬ、併牛の子を育てるための牛乳を人間として子を育てる人乳を持ち乍ら夫を廢止して牛乳を吞ませねばならぬと云ふは間違つた話である。此頃漸く目が覺めて人の子には母乳が適當だ、若し母親に病氣でもある場合には牛乳を吞ませて補ふは宜しいと云ふことに成た。その差圖する醫の中に人乳排斥した本人が居るのに驚たことである。

人も身分によりては母乳あり乍ら吞ませ難きものはある。其は労働者婦人などです、外國にはそんな連中は悉く牛乳育ちの子なりと申して宜しい、夫を眞似して日本の貴顯紳士ども云はるゝ人達が可

愛子供を榮養不良にするのが少なくなるとは恥かしき次第である。

三四百人は殺さないと眞の名醫にはなれぬと云ふ話も、例の匙加減であらふ。外國で修めた學理を以て加減なしに其儘日本人に施すならば間違の起ることとせう。大人の吞む量を小兒に吞ませたら薬が却て毒となるは分り切たこと、外國人ご日本人とは身體と云ひ常食と云ひ總てに於て相違點が少なくない。それを加減なしに習ふた通り配劑して與へられては殺さるゝ仲間入は必定といはねばならぬ。その過失は警察に知らずとも殺人罪は動かぬ所、病氣を癒して貰ふ積りが、三百人の匙加減過失に遇ふは不幸の次第である。

世の中に人を殺し罪にならぬものは醫師と裁判官だと云ふ話も聞た。罪にならぬのみか澤山殺す程名醫といはれ、名判官と稱せらる

るのである。是加減知らずから起るのである。そんなことを彼是云ふは舊弊だご笑ふものもあるも知れないが成程舊弊は宜しくない。併舊と弊とを括り合せ舊さへ云へば正眞の事まで捨る傾きあり是甚だの誤りである。弊は舊に限らず新にもあるものと云ふことを知らねばならぬ。それを新さへいへば弊まで取上げ舊さへいへば正まで捨る、是即加減知らずの過失である。

よい加減は六けしいに違ひない。小言好きの亭主今日の飯は硬い今日の汁は鹽辛い、今日の飯は粥に齊しい、今日の汁は塩氣なだこいつも小言云ひ續けて居る。女房は心配して飯も汁も可い加減の物が出来た。膳に向ふた、亭主箸を取上げうんとすーこも云はずいつにない小言もなく食して居るから女房今日のお加減はいかゞで

すかと尋ねた。矢張黙して居るゆへ硬くありませんかと問へば、硬くはないと答へた、軟か過ぎますかといへば、軟かくはないと答へた、汁は鹽辛くありませんかといへば辛くないと應じた、薄過ぎますかといへば薄くないと云ふ。夫では今日は飯も汁も可い加減ですかと更に問ふたら、否危ない加減だご答へた話がある。いかにも危ない加減と云ふに一理ある、僅かの違ひにて硬軟濃薄の差を生ずるのであれば危ない加減とも云へる。けれども硬からず軟か、らず濃からず薄からぬ飯汁なら可い加減ご云はねばならぬのを、危ない加減と云ひしは小言好きの本人には尤もな言葉なりと申してもよからふ阿々。

舊弊があれば新弊もある、新だから皆が皆取るべきものにも非ず

舊だから皆が皆捨つべきものでもない。そこが加減せねばならぬ所である。新舊に依て價值を定むることは出来ないのです。この世界で一番舊きものは何であらふ、種々ありませうが其中の隨一は太陽である。之を舊弊として無用に屬せられ様か、釋迦如來の教へは約三千年前よりあるが今現に活動して居る。それを辨へずに加減せず新らしいからと云つて新弊をも取り用ひ、舊ひからと云つて舊正をも捨ることになれば大害を醸すことは必定である。

加減せよ、可い加減にせよ、人の身體に就てもよく云ふことです。此頃はお加減はいかゞです、お蔭によりまして變つた事もありませぬ斯様に申しませう。加減の悪ひのは健康を害したと、加減の善ひのは健康を損はぬこと、然れば人の身體上も加減が第一である。

熱くして這入兼たり、水離れしたばかりの風呂桶に向つて可い加減は誰も云はぬ。這入るに心地よき所を可い加減と云ふであらふ。

所が可い加減を誤用するのがある。此事は何としませうと相談せられた時、まあ可い加減にして置けとの返答、是等の可い加減は悪ひ加減に屬するものであらふと思ふ。けれどもその根源を尋ねたら可い加減にしては親切語で有たのが轉化し悪化してまあと云ふ語が頭に添ふて、まあ可い加減に云ふ不親切語に成たのかも知れない。

四十八 目的と云は何物乎

近來は何事にも目的と云ふ文字が文章にあらはれ言語にあらはれ

目にも耳にも餘る程ですが大體いかなる所にあてはめるのが至當なのでせう。目的が立たぬか立つたとか云ふ時の目的は、見込みと云ふに替らぬ様である。見込みと云は、見當である、見當とすれば的である、的は箭矢や銃丸の見當になるものなれば、的を見當に箭矢や銃丸を放つ如く一の不動的を見認めて置くが目的にして、それに進み近づきの中したのを目的が立つたと云ひ、的中しないのを目的立たぬと云ふ譯になる。

然れば目的は確乎不拔の物ならねばならぬ。確乎不拔の目的ありて進行するなら、遅速の差は有りても早晚目的に達し得ぬ道理はないのである。けれども今の世に多くの人の云ふ目的は那須與市の射落した扇面的に類した物にて、ふらく動き止まぬ的なりとも云ひ

難い様な元來影もなき空想を描いて、それを目的と云ふらしい。影もない空想をもつて目的とするのは宛も空米相場師の様なものであらふ、相場にあたるを目的に達したと云ひ、當らぬのを目的外れと云ふ實に怪しい目的である。

眞の目的といふものは鼻尖の話ではない。至極高尚なる所にあるのであらふと思ふ。今日の前にちらつき、鼻の尖にぶらさがる物にて云ふときは太だ淺薄卑小なもので、小供の間は只美味なる物が喰度と云ふが目的と云はねばならぬ、それが青年時代に成てくると戀愛など、云ふことを味はふ様になる。すると美服を莊り度といふ衣服欲やら、化粧欲が強くなるのは當然である。然れば喰度と云ふことのみの時代は喰はれさへすれば目的が達したなれども、衣服欲や

化粧欲を起す時代になると喰ふのみでは目的を達したとは云はれな
い。

こんな按排に目的は確乎不拔でない、一も定まつて居らない。乃
て何うしても確乎不拔の精神より、此事一つは仕遂げねば置かぬと
云ふ法藏菩薩願力の初發心の如き理想を目的とするのでなければな
らぬと思ふ。佛教では六凡四聖と申して、迷が六つ悟が四つ其四聖
の中の初段、所謂入口が阿羅漢である。羅漢にも種々ありて十六羅
漢あり、十八羅漢あり、五百羅漢ありて拙納の如きはたらかんは局
外である。

阿羅漢といふ名は梵語、之を漢譯には無學としてあります。無學
と云ふは私如き學問なしと云ふことではない、學び盡してこの上學
ぶもの無くなつた境界の事である。是が阿羅漢と云ふ梵語である。
學問にも精神にも求め盡して此上に何一つ求むべきものなしと云ふ
までに達した境界のここを、無學と名くるべきは無學も豪ひもの
でないか。

さて阿羅漢無學の目的は我々に於ては起されもせず、又今日昭和
の時代に起すにも及びません。確乎不拔の理想を目的とすると云ふ
こと丈は心得て置かねばならぬ。併人間は年齢の老若に依て相違は
あります、青年は前途が長く老人は短きゆへ各自前後の見方に相違
ありて青年は希望に生きるもの、老人は追懷に生きるものと申して
よからふ。老人は先きが短いから進み行く方には希望がな、ゆへ、
只俺等の若き時にはくく過去を繰返しますので青年と衝突する筈

です。

「梅干を馬鹿にさんすな昔は花よ鶯啼かせたところもある」と云ふこともある。大ひに然りです。然れどもさう云ふ筆鋒を擔ぎ出すと、馬糞も黙つては居らぬ、何故ならば「馬の糞元を探れば野山の草よ鈴蟲鳴かせたところもある」と歌ふに定つてる。けれども梅干、馬糞に成たら馬糞ですからいくら威張ても、握り飯ご心中する様に成た皺くちや梅干が是でも昔は竹外の一枝香馥郁たる梅の花にて鶯を啼かせたんだと自慢しても、ほんの昔話で役に立たない。松蟲や鈴蟲を鳴かせた草でも、馬の腹潜つて出た以上馬糞の自慢話は臭くして堪らぬ。

俺等の若き時代にはな—と昔自漫の老人話は黴が生へて居ますか

ら今の青年には鼻をつまられることになるから餘り顔出し口出しはしないのがよからふと思ふ。かく申すとあなたはお年いくつになられたのとお尋ねなさるでせう、私は肉體の戸籍面は八十二年なれども精神はこれでも十八です、青年諸氏と取組むも角力に負けはせぬと氣張て居ます。これが瘦我慢と云ふのであらふ是はしたり脇道へ入た申譯ありませんでした。

元に戻りて確乎不拔の理想を目的とすべきお話をいたしませう。その目的は我々日本國民として國家のためと云ふ理想を動かさないのに限ります。その目的の動かぬ確乎不拔の理想も糧に乏しひと飢てひよろしくになるから糧を與へて飢渴せぬ様に注意せねばならぬ。理想もとより精神なれば、肉體と違ふて日に三回の糧を與ふる

世話はいらぬが、月に三回や五回世話すべきことを忘れてはならぬ。毎朝顔を洗ふことを忘るゝものはなからふが、心の顔はいつも洗はずに氣も付かぬので平然として居らぬか、風呂に入るとき石鹼以て身體は清めるが精神の入浴を忘れては居らぬか。

肉體の上にはかり糧を與へて満足して居る人なれば其人は不具者である。一步譲りて申せば人間の見習生である。肉體精神共に人間として欠くべからざる所のものなれども若し主伴上下の名を施すときは精神は主にして上なり、肉體は伴にして下なりと云ふべきである。

その精神を充實させて行くには肉體の如く食物が要る、一口に早く云へば宗教の信念である、宗教信念のなき人は精神に飢渴して居

る不具者ですから碌な事はしませぬ。俗に云ふ貧の盗み位ぢやない餓鬼の食擇ばずに成て、肉體の一生に止らず、不滅の精神にまで及ぼし永劫苦患を受ることになります故確乎不拔の目的を宗教信念、所謂如來の心を目的に信仰すべきである。

四十九 唯物唯心の改造論

此節は改造と云ふことが大流行にて、月刊の雑誌にも改造と云ふがある。一にも改造二にも改造と叫ぶ、その改造は現代式で云へば社會の改造を主とするのであらふ、然ふしてみれば先づ人間の心を改造せねばならぬ事と思ふ。さもなくば眞の改造は出来るものではない、改造を主張するに二派ありて一は唯物論者、他は唯心論者なり。唯物論者は物質主義にして、唯心論者は精神主義である。物質

主義は機械論境遇論をもて社會改造を叫びます。精神主義は目的論文化論を以て人心改造を叫ぶのである。この二派の主張は何れも一面の眞理はあるが一方に偏しては全面的眞理とは云ひ難くなります。で茲に一考を要する所であらふと思ふ、所以は元來物質と精神とは同一物の二方面であらふと思ふ。

主觀的よりは精神と名け、客觀的よりは物質と呼ぶので二者はなるべからざるものご云ふべきであるまいか。元來色心不二とて萬有は一体なり、身と心と相合して人となり、内外相應して行動を規範するのである。身と心ご分離して人となるものなく、人なき所に社會はない、社會なき所に改造の論は必要ないご申すべきことである。一切の論議は此全人の理解を基調とし根本とごすべきであらふ

と思ふ。

主觀的の精神が強きか、客觀的の物質が強きかの問題は無用の論であるまいか、何故ご申すに物質は破壊しても精神は破壊するものでないことを知れば足るのである。宋の曹翰將軍が賊を征伐のために進軍した時、沿道に寺が見へたので一休みし様と思つて立寄た、恰度その寺に衆僧集り生死問題の下に、生何ものぞ死何ものぞと大氣燄を吐て居たのですが多數の兵がどしどし這入て來たのに驚き生は寄なり死は歸なりの高説も何處へか吹飛で、一同逃て仕舞つた。縁徳禪師一人は平氣な顔で坐禪して居られた、するご將軍は劍を抜て禪師の背後に立ちて「老僧の背後には殺人を何とも思はぬ將軍の居るを知らないか」と叫んだ。すると禪師は「汝の面前に、死ぬ

ここを何とも思はぬ老僧の居るを知らないか」と返問せられたとの話がある。いかにも愉快千萬なり、此一條の話にて物質的は精神的に及ばぬこと明かである。さればとて精神的のみに偏して物質的を忘れてはならぬから、程よく加減して健康の人間になり生涯を過さねばならぬ。ですから根本の精神に慈母佛陀の乳を呑み、他方來の牛乳を口にせぬ様注意するここを忘れずに人心改造が出来れば社會改造は期せずして出来ることである。

五十 夢の世に夢を語る

世人の多くは世は夢なりと口に語り、手に書くことは知て居乍ら口に云ふのみ手に書くのみにて、心に知たものが少ない様に思ふ。若し心に世は夢なりと眞に知たのならば、善き夢を見つゝ世の中を

渡りさうなものである。それが口先や手先において心に夢と思はぬ所から我執を募り、悪念に培ひ自分が蒔た悪因によりて苦果を感じ後悔すれども、六菖十菊終に生涯の間汚名を拭ひ兼ねるご云ふ始末になる。是みな夢と知らざるの過失に由るのであらふと思ふ。夢の世に夢に夢みるのでも、盧生の夢は八十年の榮華を究めました、夢の覺るまでは出世心地の愉快で有たに相違ない。今より四十年前、母の病氣中看護の或夜盧生以上の夢をみました。私の喜悅を述てみませう。何處よりこも判らず人力車にて疾驅し行く道路の兩側は人の山を築いて居ます。その多くの人が稱ふる念佛の聲は天地に響く、それが喧くは感じない殊勝に耳朶に觸るので有た。自分も負けず劣らず稱名念佛しつゝ、進行するに隨て道路は廣くなり且奇麗に成て來

た。見馴れぬ艸木に珍らしき花を開き、そよ／＼と吹く風は衣袖を
 翻へし得も云はれぬ心地、加之吹來る風は馥郁たる香を送りて鼻を
 衝き、草木の花も葉も光りを放つて路傍にうつろひ、小石までが金
 色にみねる樹下を縫ふが如く流るゝ水は澄み切て水晶の色をなし、
 微妙の音をなしつゝ、樹林の風に和するなどは並々の世界も覺へず
 忽ち浮み出づるは左の和讃でありました。

寶林寶樹微妙音

自然清和の伎樂にて

哀婉雅亮すくれたり

清淨樂を歸命せよ

七寶樹林くに、みつ

光耀たかひにかゝやけり

華果枝葉またおなじ

本願功德聚を歸命せよ

清風寶樹をふくごきは

いつゝの音聲いたしつゝ

宮商和して自然なり

清淨勳を禮すべし

一一のはなのなかよりは

三十六百千億の

光明てらしてほがらかに

いたらぬごころはさらになし

一一のなかのはなよりは

三十六百千億の

佛身もひかりもひとしくて

相好金山のごとくなり

身體髮膚之を父母に受く敢て毀傷せざるは孝の始めなり、身を立て道を行ひ名を後世に揚て以て父母を顯はすは孝の終りなり。孝經に出てあることは世に知らぬものはなからふ。けれども知て居て行はぬのなら知らぬのと同じことである。勅語は讀でも克く忠に克く孝にとある詔勅を用ひないのなら勅語よみの勅語知らずである。道をふみ行ふと云ふことを一生涯と向ふ長く思ふと退屈すれども夢の世の夢なりと思へば退屈なしに出來ます。貧民を救ひ困窮を賑

はして命の親なりと敬慕せらるゝ如き善夢は覺めて後も心地よきことであるまいか。乃で世の中に於て欲をはなし、善事を爲した後に振り返りて御覽なさい愉快なものです。孝經の教訓は今生一世の父母に就てなれども之を廣義に解釋すれば一世の父母に限らぬ教訓ともみられることである。

釋迦彌陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

發起せしめたまひける

釋迦彌陀の慈悲よりぞ

願作佛心はぬしめたる

信心の智慧にいりてこそ

佛恩報ずる身とはなれ

我等が永劫の父母は釋迦と彌陀との二尊である、二尊の仰せに順ひ信心決定して稱名念佛する身はおのづから王法仁義の道に違はず堅く守りて、他から佛祖の教へを用ゆるものは流石にその徳あるものと敬慕せらるゝ様になるのが、所謂未來の父母をあらはすと云ふ道理である。それが今生の掎側にては國法民法にすべて背かず、國民の本分を全ふ盡し、刑法に係るもの少なくなれば御國の光りは海外まで渡り擴がり、天皇陛下の御高德を顯はすことになれば父母と云ふが我皇國の兩陛下の事ともみられる道理でありませんか。斯の如きは夢の世の善き夢にして幾回みても差支なき夢でありません

か。

夢の世と知りつゝ、覺めぬ夢の夢

あしき夢みずよき夢をみよ

夢の世と知ればしばしの間なり

よくはたらけよ夢覺るまで

佛陀の心と凡夫の心 (終)

昭和七年十一月十一日 印刷
昭和七年十一月十七日 發行

佛院の心と凡夫の心

定價金 五拾錢

不許複製

著述者 小泉了諦

發行者 松田善六
京都市油小路通花屋町上ル西若松町二四五

印刷所 吉本印刷所
京都市北小路通坊城西入夷馬場町一四

發行所

京都市油小路 電話下二八八六番
花屋町上ル 振替大阪二三四九番

顯道書院

椰陰 小泉了諦師著

四六版洋本定價壹圓
總クローヌ箱入送料六錢

慈悲深き救ひの父母

本書は著者小泉和上が尊い自己の信念に基ゐて眞宗信仰の根底となれる浄土和讃にかの有名な親鸞聖人の歎異鈔のお眞意を汲み入れて自己、秘藏の信念を明らかにせられた敬虔な著者の信念記録で一字一句貴い佛陀の大悲が溢れてゐる

安藤州一師著

四六版壹百十餘頁 定價五拾錢
ルビ付裝幀頗優美 送料四錢

安心立命の陽明學

烈火の苦惱に遭遇し、百死千難の中に在て、
默坐澄心、忽ち眞理の光明を拜して、大安心
を得たるもの、是れ陽明學の發端なり。

本書は陽明の安心を敲いて、火中の蓮花を尋
ねたる。講習五日の記録なり。一讀以て死生
を忘るゝに足る名著である。

目次

- 一、學問の頭腦
- 二、眞性の要求
- 三、火中の蓮花
- 四、業報の解脱
- 五、莊嚴の淨土

終

